

向 河 原 遺 跡

第4次発掘調査報告書

2002

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

むかい がわ ら

向 河 原 遺 跡

第4次発掘調査報告書

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区遠景

巻頭図版 2



完掘状況



S T 1 竪穴住居跡カマド

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、向河原遺跡の調査成果をまとめたものです。

向河原遺跡は、山形市の北西部明治地区に立地します。付近は豊かな田園地帯を形成し、近年は果樹・野菜栽培なども盛んに行われています。本遺跡の北側には白川（馬見ヶ崎川と村山高瀬川が合流）が流れ、対岸には渋江、田中などの集落があります。本遺跡周辺には国指定史跡の嶋遺跡をはじめ、今塚遺跡、服部遺跡、藤治遺跡、馬洗場B遺跡など、古墳から平安時代にかけての遺跡が数多く点在し、古くから人々がこの地で生活を営んでいたことがうかがえます。

この度、特定道路山形羽入線道路改築工事に伴い、工事に先立って向河原遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代の堅穴住居跡、井戸跡、旧河川跡、溝跡、土坑などが検出され、平安時代の須恵器や土師器、鉄製品などの遺物が出土しました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木 村 宰

例　　言

1 本書は、平成13年度特定道路山形羽入線道路改築工事に係る「向河原遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は山形県の委託を受けて、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名　　向河原遺跡　遺跡番号　平成2年度登録

所　在　地　　山形県山形市大字渋江字向河原

調　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

受　託　期　間　平成13年4月1日～平成14年3月31日

現　地　調　査　平成13年7月10日～平成13年10月12日

調査担当者　　調査第二課長　尾形與典

主任調査研究員　伊藤邦弘

調　査　研　究　員　　黒沼昭夫（調査主任）

副　調　査　員　　竹田純子

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、村山総合支庁建設部道路課、村山教育事務所、山形市教育委員会、及び山形県教育庁社会教育課文化財保護室など関係諸機関にご協力をいただいた。

5 本書の作成・執筆は、黒沼昭夫、竹田純子が担当した。編集は須賀井新人、竹田純子が担当し、全体について尾形與典が監修した。

6 委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測　　株式会社ジーイエス仙台

遺物保存処理　　株式会社ニッセツ・ファイン・プロダクツ

釜石文化財保存処理センター

基準点測量　　株式会社工藤測量設計

7 出土遺物・調査記録類については、報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

凡　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次のとおりである。

S T…堅穴住居跡 S K…土坑 S D…溝跡 S P…ピット S G…河川跡
S E…井戸跡 R P…登録土器 R M…登録鉄製品 R Q…登録石製品
P……土器 S……石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 概要図・遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系による。図中の方位は座標北を示す。

(2) 遺構実測図は1/40~1/200の縮尺で採録し、各々スケールを付した。なお、遺構実測図中の●は、遺物出土地点を表す。

(3) 遺構実測図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

炭化物層：■■■■■ 焼土：■■■■■

(4) 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については、算用数字を付して区別した。

(5) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

(6) 遺物実測図・拓影図は、1/1・1/2・1/3の縮尺で採録し、各々スケールを付した。

(7) 遺物観察表中の（ ）で示した計測値は、図上復元による推定値を示す。出土地点欄の層位では、「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示す。なお、遺物実測図中、土器断面の黒ベタは須恵器を表している。

(8) 遺物実測図中のスクリーントーンは、下記のとおりである。

黒色処理：■■■■■ すす：■■■■■ 墨：■■■■■
朱墨：■■■■■ 使用痕跡：■■■■■ 金属部分：■■■■■

(9) 遺物図版については任意の縮尺で採録した。

(10) 遺物番号は、遺物実測図・遺物図版ともに共通したものである。

(11) 遺構覆土の色調の記載については、1999年農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
III 遺跡の概要	
1 遺跡の層序	7
2 遺構と遺物の分布	7
IV 検出された遺構	
1 堅穴住居跡	8
2 井戸跡	26
3 土坑	28
4 溝跡	29
5 河川跡	30
V 出土した遺物	
1 平安時代	39
2 古墳時代	41
3 弥生時代	41
VI まとめと考察	59
報告書抄録	61

表

表1 堅穴住居跡観察表	14
表2 出土遺物観察表1	56
表3 出土遺物観察表2	57
表4 弥生土器観察表	58
表5 石製品観察表	58
表6 金属製品観察表	58

挿 図

第1図 調査概要図	2	第20図 S E 268・218井戸跡・ S K 220・221土坑	35
第2図 遺跡位置図	4	第21図 S D 40・429溝跡	36
第3図 遺構配置図	5	第22図 S D 235・163溝跡	37
第4図 S T 1 堅穴住居跡・カマド	15	第23図 S D 18・217・222溝跡	38
第5図 S T 1 堅穴住居跡掘方・ S T 3 堅穴住居跡	16	第24図 出土遺物（1）	42
第6図 S T 3 堅穴住居跡・カマド・ S T 4 堅穴住居跡	17	第25図 出土遺物（2）	43
第7図 S T 5 堅穴住居跡・ S T 5 堅穴住居跡掘方	18	第26図 出土遺物（3）	44
第8図 S T 190・157堅穴住居跡	19	第27図 出土遺物（4）	45
第9図 S T 186堅穴住居跡・カマド	20	第28図 出土遺物（5）	46
第10図 S T 2 堅穴住居跡・カマド	21	第29図 出土遺物（6）	47
第11図 S T 94堅穴住居跡・カマド	22	第30図 出土遺物（7）	48
第12図 S T 147・150・162堅穴住居跡	23	第31図 出土遺物（8）	49
第13図 S T 161・179・157堅穴住居跡	24	第32図 出土遺物（9）	50
第14図 S X 431土器捨て場	25	第33図 出土遺物（10）	51
第15図 S K 23・24土坑	30	第34図 出土遺物（11）	52
第16図 S E 281・247・276井戸跡	31	第35図 出土遺物（12）	53
第17図 S E 215・201・280井戸跡	32	第36図 出土遺物（13）	54
第18図 S E 284・273・243井戸跡	33	第37図 出土遺物（14）	55
第19図 S E 214・244・208井戸跡	34	第38図 堅穴住居跡主軸方位及び 主軸長一覧	59

図 版

- | | |
|------------------------|----------------|
| 卷頭図版 1 調査区遠景 | 図版13 出土遺物 (4) |
| 卷頭図版 2 完掘状況 | 図版14 出土遺物 (5) |
| 卷頭図版 3 S T 1 壊穴住居跡カマド | 図版15 出土遺物 (6) |
| 図版 1 作業状況他 | 図版16 出土遺物 (7) |
| 図版 2 井戸跡土層断面、完掘状況他 | 図版17 出土遺物 (8) |
| 図版 3 S T 5 壊穴住居跡完掘状況 | 図版18 出土遺物 (9) |
| 図版 4 S T 3 壊穴住居跡完掘状況 | 図版19 出土遺物 (10) |
| 図版 5 S T 147 壊穴住居跡完掘状況 | 図版20 出土遺物 (11) |
| 図版 6 S T 4 壊穴住居跡完掘状況他 | 図版21 出土遺物 (12) |
| 図版 7 S T 186 壊穴住居跡完掘状況 | 図版22 出土遺物 (13) |
| 図版 8 S T 1 精査状況 | 図版23 出土遺物 (14) |
| 図版 9 遺物出土状況 | 図版24 出土遺物 (15) |
| 図版10 出土遺物 (1) | 図版25 出土遺物 (16) |
| 図版11 出土遺物 (2) | 図版26 出土遺物 (17) |
| 図版12 出土遺物 (3) | |

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

向河原遺跡は、山形市北西部、明治地区の大字渋江字向河原に所在する。本遺跡は立谷川扇状地の扇端部に立地し、北方100mに白川（馬見ヶ崎川と村山高瀬川が合流）、更に北方2kmに立谷川、西方には須川と、最上川に注ぐ河川が近接して流れ、古くから水害に悩まされてきた地域である。

本遺跡は、平成2年度に山形県教育委員会が行った上山・山形・天童・東根地区基礎調査（表面踏査）によって発見され、新規登録された。同年、東北中央自動車道相馬・尾花沢線が、上山～東根間都市計画道路整備事業として計画された。自動車道が本遺跡に係ることから、平成11年3月、山形県教育委員会により詳細分布調査が行われた。引き続き同年4月に日本道路公団の委託を受けた財團法人山形県埋蔵文化財センターが、遺跡範囲や遺構数、深さを詳しく調べる第1次調査（予備調査）を行った。それを受け、同年5月から9月まで事業区域内の遺跡範囲のうち5,400m²を対象に第2次調査を実施した。その結果、主に平安時代の遺構が確認され、多くの遺物が出土している。

平成12年度には前年度調査区の東側、市道諏訪線に係る3,200m²について、平成12年8月から10月までの日程で第3次調査を実施した。前年度同様、平安時代を中心とする堅穴住居跡や溝跡などの遺構が確認され、平安時代の土師器や須恵器などが出土している。

平成13年度には、建設中の東北中央自動車道の東側に、特定道路山形羽入線道路改築工事が計画された。県教育委員会は、これに先立ち平成12年10月に事業予定地について詳細分布調査（試掘調査）を実施した。その結果、堅穴住居跡や柱穴等が検出され、遺跡範囲が前年度調査区の更に東側まで伸びることが確認された。

これらの資料をもとに、山形県教育委員会と事業主体者である山形県土木部との間で、遺跡の取り扱いについて協議が行われた。その結果、同事業との関連でやむをえず削平されると判断された、向河原遺跡の1,000m²について緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになった。

平成13年度に財團法人山形県埋蔵文化財センターが、県の委託を受けて第4次発掘調査を実施することになったものである。

2 調査の経過

平成13年7月3日、村山総合支庁建設部道路課において、向河原遺跡に係る遺跡発掘調査の打合会を開催し、発掘調査に至る経過報告、調査体制、調査の方法等が確認された。

今回の調査は、7月10日から9月4日までの実質35日間の予定で、道路部分1,000m²を対象として実施された。7月10日に調査事務所を設置し、現地調査を開始した。7月12日には、重機による表土除去作業を行い、遺構確認面まで掘り下げる。その後、ジョレン等の道具を使用して面整理作業を行い、堅穴住居跡・井戸跡・柱穴・溝跡・河川跡等を確認した。

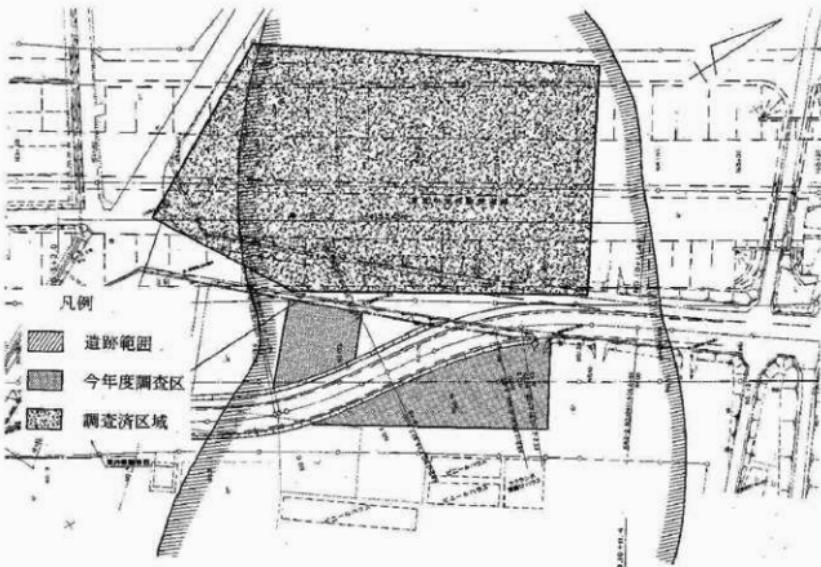
今回の調査は、調査区が既在の道路の東西に分かれているため、道路の西側をA区、東側をB区というように仮称した。7月24日、A区より検出した遺構の精査を開始した。その後、記録作業等の進捗状況を勘案しながら、A区とB区の調査を並行して進めていった。

出土した遺物は、登録した後、出土地点・レベル等の記録を行い取り上げた。その後写真撮影、断面図・平面図作成などの記録作業にあたった。

調査を進めていく過程で、B区に於いて遺構の重複が確認され、当初予定していた調査期間内で調査を終了することが困難なことが判明した。そのため、8月31日に調査期間の延長等について県教育委員会及び県土木部と協議を行い、10月12日まで調査を延長することとなった。

調査区を区画するグリッドは、平面直角座標系第X系により $5\text{m} \times 5\text{m}$ の大きさで設定した。グリッドの設定にあたっては、過去2カ年の調査結果をふまえ、遺跡全体の遺構の分布が連続してとらえられるように、昨年までの調査で設定したグリッドと連続するよう設定した。X軸は西から東に12~24、Y軸は南から北に19~29として座標を設定し、「12-19区」というように位置を標記した。なお、方位は座標北を表し、高さは海拔標高で表す。

10月11日には、遺構の空中写真測量を実施し、10月12日に調査を終了した。なお、10月9日に現地で調査説明会を開催したところ、約40名の参加が得られた。



第1図 遺跡概要図 ($S = 1 : 1,000$)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

向河原遺跡の所在する山形市は、県域の東部中央に位置する。東は蔵王熊野岳を含む奥羽山脈によって宮城県との境を成し、西は白鷹山を主峰とする丘陵が取り囲む。

本遺跡が位置する山形市北部では、奥羽山脈を源とする立谷川・高瀬川が西流し、複合扇状地を形成している。また、同じく西流する馬見ヶ崎川は七浦付近で高瀬川と合流し、白川となって須川に注ぎ込む。これらの河川によって形成された扇状地の扇端部には湧水地帯があり、その下流の前縁帶には、特に自然堤防の発達が見られる。扇頂部から伏流し扇端部で湧き出した水が流路を形成して、自然堤防の間をぬって網状に広がる。このため、古くから水害に悩まされた地域であるが、昭和25年頃から始まった土地改良事業や昭和34年からの白川沿岸畠地区画整理事業など、長年の大事業を通して水害や干害の克服に力を入れた農業先進地域である。

本遺跡は、白川左岸の自然堤防上に位置し、標高は約97mを測る。調査前まではりんごやさくらんぼの果樹園として利用されていたほか、市道諏訪線が走り山形市街と本遺跡が所在する明治地区とを結んでいた。現在は、建設工事中の東北中央自動車道が南北に走っている。

2 歴史的環境

本遺跡周辺の自然堤防とその後背湿地には、弥生時代中期から平安時代にかけての多くの遺跡が存在する。

弥生時代の遺跡は、県内を代表する遺跡が多く存在する。七浦遺跡では、石包丁が3点出土し、水稻農耕が行われた証拠として重要視されている。

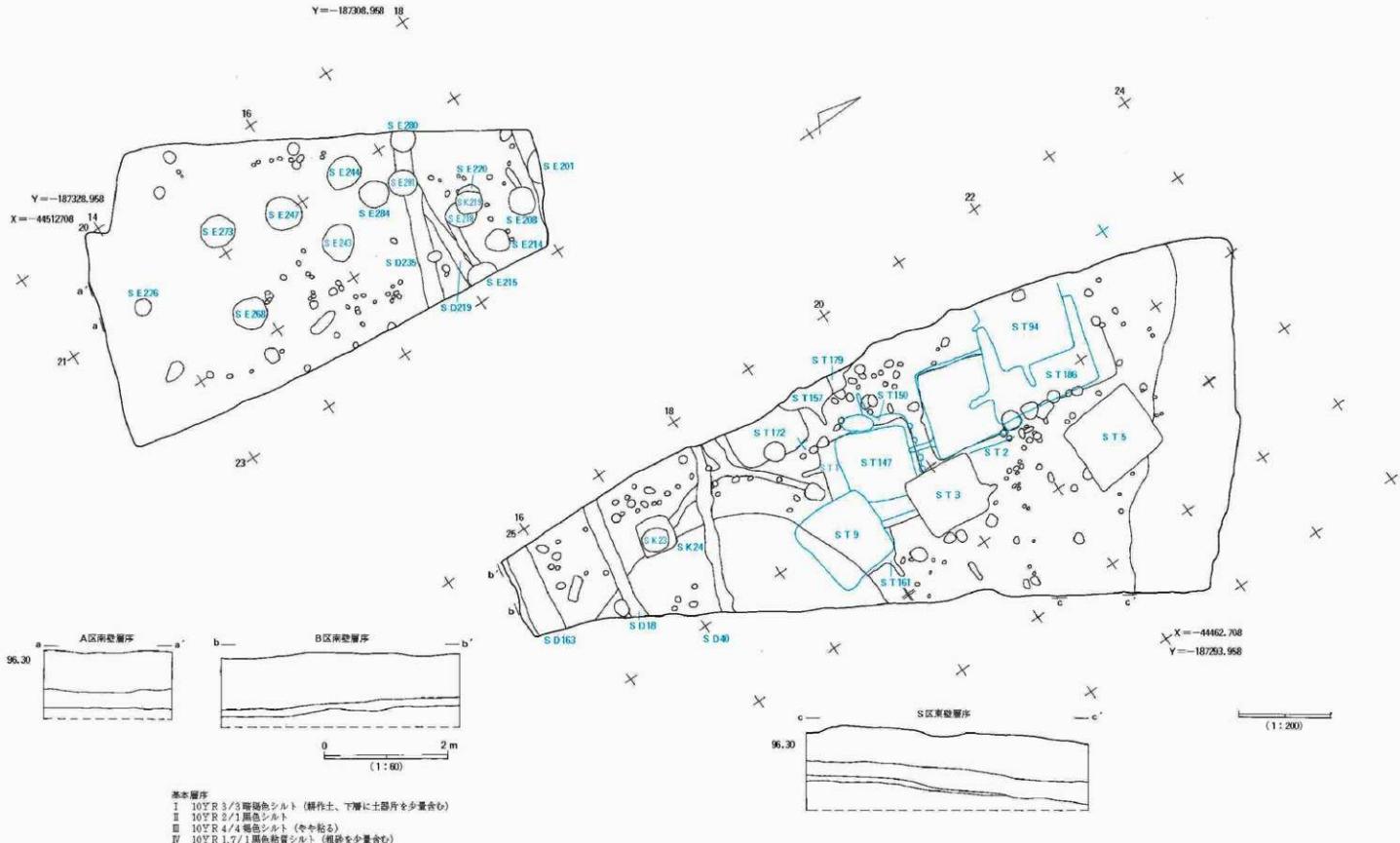
古墳時代に入ると遺跡数が増加し、さらに多くの集落が営まれたことがうかがえる。白川対岸の渋江遺跡では、焼失住居をはじめ多くの竪穴住居が検出され、長期間にわたって集落が営まれたことが明らかとなった。山形自動車道を挟んで2km南の馬洗場B遺跡からは内行花文鏡の破鏡が出土している。国指定史跡である嶋遺跡では、農耕具や機織具などの生産用具、容器をはじめとする生活用具など、多くの木製品が出土している。住居跡のほかに倉庫跡が検出され農耕集落跡として著名である。また、集落周辺には衛守塚2号墳などの古墳が分布している。

奈良・平安時代には、自然堤防上に立地する遺跡が増加する。本遺跡や境田C遺跡、見崎遺跡など、白川左岸に立地する遺跡が目立つ。これら遺跡の点在は、平安時代に入り後背湿地を利用した水田経営が一段と安定したことを示している。当該期の集落跡としては掘立柱建物・井戸・土坑等で構成される境田C遺跡があげられる。また、本遺跡の南東4kmに位置する今塚遺跡では、仁壽三年(853年)の年号が記された木簡が出土し、役所的機能を備えた集落跡と捉えられる。

弥生時代以来、水に恵まれた当地が人々の生活の場として、また、地域内の政治的要所として利用され続けたことが想像できる。



第2図 遺跡位置図（国土地理院2万5千分の1地形図「山形北部」を使用）



第3図 遺構配置図・基本層序

III 遺跡の概要

1 遺跡の層序

立地と環境でふれたように、向河原遺跡は山形市北西部明治地区に立地しており、調査区の北方100mを白川（馬見ヶ崎川と村山高瀬川が合流）が西流している。

第3図は、本遺跡の基本層序である。前述の通り、調査区が既存の道路の東西に分かれているため、道路の西側をA区、東側をB区というように仮称し、それぞれの層序について述べたい。a-a'はA区南側の基本層序である。I層は耕作土で、暗褐色を呈するシルト質の土壤である。II層との境に少量の土器片を含む。これは、区画整理の際に土の入れ替えなどが行われたことに起因するものと思われる。II層は、黒色のシルト質層である。しまりが弱く少量の土器片を含む。III層は、褐色を呈するシルト質の土壤で、この面を掘り込むようにして遺構が確認できる。

b-b'はB区南側の層序である。A区と同様の堆積状況を示している。

c-c'はB区東側の層序である。堆積状況は他の2点の層序と同じ様相を示すが、II層とIII層の間に、粘質を帯びた黒色のIV層が認められる。この層は、小粒の砂を含み、B区の北部にのみ堆積が認められる。これは、B区北端に旧河川跡と考えられる厚い砂の層が確認されており、この砂の層のI層と同じ堆積物である。また、B区は中央から北方向に緩やかに傾斜しており、標高が低い北側にのみ堆積したのものと考えられる。

2 遺構と遺物の分布

1,000m²を対象として実施した今回の調査では、竪穴住居跡、旧河川跡、土坑、柱穴、溝跡、井戸跡等、総数400基を越える遺構が確認された。

A区の遺構の中心は井戸跡で、14基検出された。いずれも素堀の井戸で、下半が膨らんだ形状になっている。元々の形は下に行くに従って細くなる円筒形をしていたものが、水が湧き出る際に壁際の土が削り取られて崩落し、このような形状になったと考えられる。昨年度の3次調査で検出された溝跡に連続する溝跡が、2条検出されている。これらに連続すると考えられる溝跡が、B区でも検出されており、更に東側へと連続していることが確認された。

B区の遺構の中心は、竪穴住居跡である。確認された住居跡は17棟にのぼる。狭い範囲に重複して検出されており、何度も建て替えを行ったことがうかがえる。また、住居跡が確認されているのは、前述した溝跡と調査区北端の河川跡の間に限られており、この溝跡と河川跡が遺構の分布を規制する何らかの要因になっていることがうかがえる。

今回の調査に関わる出土遺物は、コンテナ30箱である。弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器、平安時代の土師器や須恵器、紡錘車や刀子などの鉄製品、石製品等が出土している。弥生土器は、包含層よりの出土がほとんどで、桜井式や天王山式に比定されるものである。しかし、弥生時代の遺構は確認されておらず、断面が激しく摩耗していることからみて、周辺に立地する遺跡から流れ込んだものと考えられる。

IV 検出された遺構

1 壱穴住居

検出された壹穴住居は17軒であり、すべて平安時代に属する。平面形は、規模の大小に拘わらず方形または不整方形を呈する。一辺の長さは3.5~6m程の範囲にあり、3.5~4.5mのものが主体を占める。カマドは9基検出した。S T 3 カマド（E L 144）は、壁からの作り出しが比較的広く、煙道長80cm、煙道幅70cmである。これに対し、E L 144を除くカマドの形態は、煙道長120~140cm、煙道幅20~40cmである。検出例は少ないが、袖幅は130~140cmが標準と考えられる。住居の重複は、S T 4→147→162→1→150などの切り合い関係から少なくとも5期は認められる。また、S T 186下にS T 156・200が認められたが、床面または床面下の検出となり、2軒のプランおよび切り合い関係は確認できなかった。また、覆土の観察が可能であった壹穴住居すべてが、自然堆積であった。

S T 1 (第4図)

位置・重複 26・27・18・19区に位置する。S T 150・161を切り、S T 147・162に切られる。
平面形・規模 南北5.1m、東西4.5mの方形を呈する。検出面から床面までの深さは、約30cmである。

主軸方位 N-16° - E を測る。

覆土 黒褐色シルトを基本とする。カマド部分以外は他の遺構に切られており、床面近くで検出した。

壁・床面 S T 150 覆土および地山を掘り込み、垂直に立ち上がる。中央部は地山を床面とし、周辺部は貼床と考えられる。

柱穴 E P 425・456は主柱穴と考えられる。しかし、深さはE P 425が12cm、E P 456が17cmと浅い。また、貼床除去後、挿図では破線で示したピットを検出している。

カマド (E L 149) 南辺西部に位置し、煙道長120cm、煙道幅20cm、袖幅140cmである。西袖付近に炭化層が広がる。被熱により褐色を呈する。

その他の施設 カマド近くに貯蔵穴と考えられるE K 379、また、E K 379に切られる土坑がある。

遺物の出土状況 カマド煙道先端より須恵器壺(53)や土師器壺(57~60)が出土している。53は、内面に擦り痕、外面に墨書きが施され、転用觀と考えられる。また、E K 379から須恵器壺(54)、土師器壺(55・56)や鉄製紡錘車(114)が出土している。55は、口縁部内面にすすが付着するなど、灯明皿の可能性が高い。

S T 3 (第5・6図)

位置・重複 27-19・20区に位置し、S T 147・150・162を切る。

平面形・規模 南北3.8m、東西3.4mで、方形を呈する。検出面から床面までの深さは約20

cmである。

主軸方位 N-5° -Eを測る。

覆土 黒褐色シルト、黒褐色シルトおよびぶい黄褐色砂質シルトとの混合層を基本とする5層からなる。

壁・床面 地山およびS T 2・147・162覆土を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床で、中央部に炭化層が広がる。

柱穴 3つのピットを検出した。

カマド (E L 144) 北辺東部に位置し、右袖と考えられる粘土が残る。壁からの作り出しが他のカマドよりも広く、煙道長も短い。煙道長80cm、煙道幅70cm、袖幅は不明である。

その他の施設 炭化層を剥がした面に土坑 (E K 169・170) を検出したが、遺物は見られないと。

遺物の出土状況 カマド煙道や床面から土師器が出土している。

S T 4 (第6図)

位置・重複 26・27・18・19区に位置し、S T 1・147・161・162、S G 171を切る。

平面形・規模 南北4.0m、東西4.3mの不整方形を呈する。西辺がやや広い台形である。検出面から床面までの深さは約30cmである。

主軸方位 N-84° -Eを測る。

覆土 暗褐色シルト、地山と同一の褐色シルト、黒褐色粗砂による堆積である。

壁・床面 北辺はS T 147・162・161覆土、南辺はS G 171覆土、東辺はS T 161、S G 171覆土、西辺はS T 1と地山をそれぞれ掘り込み、斜めに立ち上がる。先行するS T 1・147・161・162、S G 171の覆土を床面とし、中央部に炭化層が広がる。

柱穴 中央南西部に1つ検出した。

遺物の出土状況 床面より須恵器壺 (44)、土師器壺 (47・48)、高台付壺 (46)、鉄製の紡錘車 (115) などが出土している。

S T 5 (第7図)

位置・重複 27・28・21・22区に位置し、S G 171を切る。

平面形・規模 南北4.3m、東西3.9mで、方形を呈する。検出面から床面までの深さは約13cm、掘方面までは約20cmである。

主軸方位 N-6° -Wを測る。

覆土 暗褐色シルトと地山と同一の褐色砂質シルトとの混合層からなる。

壁・床面 III層と地山を掘りこみ、垂直に立ち上がる。硬化面上に焼土層が広がる。周溝を除く全面が貼床である。

柱穴 E P 125~129が主柱穴と考えられる。すべて深さは20cm弱であった。

その他の施設 西辺から南辺西部にかけて周溝が検出された。幅25~40cm、深さ10cmである。

掘り方精査中に土坑（E K130）を検出したが、豊穴に伴う可能性は低い。

遺物の出土状況 床面から遺物は出土していない。

S T190（第8図）

位置・重複 26・27・20区に位置し、S T2およびS T186内のE K321・331、S K325に切られる。

平面形・規模 南北4.5m、東西4.5mの不整方形であり、検出面から床面までの深さは約20cmである。西辺がやや広い台形である。

主軸方位 N-14°-Eを測る。

覆土 暗褐色シルトに褐色細砂が少量入る。

壁・床面 地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床で、中央部からやや南東寄りに炭化層が広がる。

柱穴 主柱穴と考えられるのはE P349・460である。深さは46~48cmである。支柱穴と考えられるE P353は、深さ34cmである。E P351はE P460に対応するが、深さは25cmである。

遺物の出土状況 床面より土師器壺（43）が出土している。

S T172（第8図）

位置・重複 25-18・19区に位置し、S T157・S E173に切られる。

平面形・規模 西半分以上が調査区外にあたり、規模は不明である。平面形は不整方形と考えられる。検出面から床面までの深さは、約16cmである。

主軸方位 N-5°-Eを測る。

覆土 黒褐色シルトを基本とした5層からなる。

壁・床面 地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床である。

柱穴 E P194・195が共に深さ30cmを測る。E P194を主柱穴と考えたいが、対応するE P192やE P193・196は15cm未満であり、やや差がある。

遺物の出土状況 床面より須恵器壺の破片（62）、土師器壺（65）や鉢（64）が出土している。

S T186（第9図）

位置・重複 26・27-20~22区に位置する。S T94、S D187に切られ、S T156・200を切る。

平面形・規模 南北5.7m、東西5.3mの方形を呈する。カマド検出面から床面までの深さは、約35cm、カマド以外の部分はほぼ床面で検出した。

主軸方位 N-14°-Eを測る。

覆土 暗褐色シルト、炭化物・焼土の混合層の2層を確認した。

壁・床面 壁は未検出である。先行するT156・200の覆土を床面とし、中央部に炭化層が広がる。硬く締まった掘り方を検出した。

柱穴 E P198・427は主柱穴、E P197・198・428は支柱穴か。

カマド（E L180） 南辺東部に位置し、煙道長130cm、煙道幅35cm、袖幅90cmである。袖幅はさらに広くなる可能性が高い。煙道部は被熱により褐色を呈する。

その他の施設 中央南西部にE K318、カマド両脇に焼土で埋まったE K321・331を検出。
遺物の出土状況 床面から刀子（119・120）が出土した。

S T 2（第10図）

位置・重複 26・27・19・20区に位置する。北辺をS T186、南東隅をS T 3に切られ、S T 190上層全体を切る。

平面形・規模 南北5.0m、東西3.7mの方形であり、さらに北へ伸びるものと思われる。検出面から床面までの深さは約30cmである。

主軸方位 N-16°-Eを測る。

覆土 黒褐色シルトに炭化物・焼土が混じる。

壁・床面 地山を掘り込み、やや斜めに立ち上がる。地山とS T 190覆土を床面とし、薄い炭化層が僅かに点在する。

柱穴 確認できなかった。

カマド（E L148） 南辺東部に位置し、煙道長140cm、煙道幅30cm、袖幅は不明である。炊き口と思われる部分に焼土と炭化層が広がる。カマド芯材は礫である。

遺物の出土状況 カマド周辺の床面から土師器壺（39～41）、カマド煙道先端から土師器壺（42）、須恵器壺（35）が出土している。

S T 94（第11図）

位置・重複 25・26・21・22区に位置し、S T 186を切る。

平面形・規模 北辺は確認できずプランは不明である。確認できた規模は、南北4.3m、東西3.8mで、方形を呈するものと考えられる。検出面から床面までの深さは、約13cmである。

主軸方位 N-76°-Wを測る。

覆土 黒褐色シルトの単一層である。

壁・床面 検出面が低く、壁は検出できなかった。先行するS T 186覆土を床面とし、カマド（E L153）付近に炭化層が広がる。

柱穴 確認できなかった。

カマド（E L153・154） 東辺南部（E L153）と南辺西部（E L154）に確認された。E L153は、煙道長130cm、煙道幅32cm、袖幅130cmである。E L154は、煙道長60cm、煙道幅20cm、袖幅は不明である。E L153はE L154に比べて遺存状態がよく、周辺に土器が点在する。E L154は袖であったと思われる粘土が残る程度である。住居廃棄の際に使用していたカマドはE L153であり、E L154はすでに使用されていなかったものと考えられる。E L153袖下にも炭化層が広がることから、袖の作り替えが想定される。芯材として礫を使用している。

遺物の出土状況 床面、カマド周辺より須恵器壺（66）、土師器の壺（67・68）や壺（69～

71) が出土している。

S T 147 (第12図)

位置・重複 26・27-19区に位置する。S T 1・150を切り、S T 3に切られる。

平面形・規模 南北3.9m、東西3.8mの方形である。検出面から床面までの深さは約30cmである。

主軸方位 N-24° - Eを測る。

覆土 黒褐色シルトを基本とする5層からなる。

壁・床面 S T 1 覆土を掘り込み、やや斜めに立ち上がる。先行する S T 1 覆土を床面とし、中央部およびその東部に炭化層が広がる。

柱穴 3つを検出。

その他の施設 炭化層付近に土坑 (E K165) が存在する。

遺物の出土状況 床面より須恵器壺 (50) や墨書きが見られる須恵器皿 (51)、土師器壺 (52)、鉄製の紡錘車 (112) や鎌 (122)、砥石 (111) が出土している。

S T 150 (第12図)

位置・重複 25・26-19区に位置し、S T 1・147、S K159に切られる。

平面形・規模 大部分が他の堅穴住居に切られる。北辺と西辺の一部以外は不明だが、方形と考えられる。検出面から床面までの深さは、約40cmである。

主軸方位 N-70° - Wを測る。

覆土 大部分が掘削されているが、カマド覆土の観察から暗褐色シルトと考えられる。

壁・床面 地山を掘り込み、垂直に立ち上がる。直床と考えられる。

柱穴 不明。

カマド (E L151) 西辺中央部に位置し、煙道長140cm、煙道幅20cm、袖幅は不明である。煙道部は被熱により褐色を呈する。

遺物の出土状況 カマド付近より土師器壺 (49) が出土している。

S T 162 (第12図)

位置・重複 27-19区に位置する。S T 1・161を切り、S T 3・4・147に切られる。

平面形・規模 大部分を他の堅穴住居に切られ、不明である。

主軸方位 不明。

覆土 黒褐色シルトを基本とする4層からなる。

壁・床面 地山およびS T 1・161覆土を掘り込み、垂直に立ち上がる。直床である。

柱穴 不明。

その他の施設 東辺に幅50cm、深さ15cmほどの周溝を検出した。

遺物の出土状況 砥石 (109) が出土している。

S T 161 (第13図)

位置・重複 27-18・19区に位置する。S T 1・4・161、S G 171に切られる。

平面形・規模 大部分を他の遺構に切られ、平面形・規模共に不明である。検出面から床面までの深さは、約40cmである。

主軸方位 N-68° -Wを測る。

覆土 不明。

壁・床面 地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。直床で、カマド周辺に炭化層が広がる。

柱穴 不明。

カマド (E L 155) 北東隅に位置し、煙道長120cm、煙道幅23cm、袖幅は不明である。袖の芯材と考えられる焼繰が残る。

その他の施設 炭化層を剥がした面に土坑 (E K 451) を検出した。

遺物の出土状況 床面より須恵器や土師器の壺 (79~81)、刀子 (115) が出土している。

S T 157 (第13図)

位置・重複 25-19区に位置し、S T 172・179を切る。

平面形・規模 大部分は調査区外にあたり、東辺の検出にとどまった。規模は不明である。検出面から床面までの深さは、約45cmである。

主軸方位 N-77° -Eを測る。

覆土 黒褐色シルトを基本とする5層からなる。

壁・床面 地山と S T 172・179覆土を掘り込み、斜めに立ち上がる。カマド周辺に炭化層が広がる。

柱穴 5つの柱穴を検出したが、深さはすべて15cm未満である。

カマド (E L 160) 東辺北部に位置し、煙道長120cm、煙道幅40cm、袖幅は不明である。

遺物の出土状況 遺物は出土していない。

S T 179 (第13図)

位置・重複 25-19区に位置し、S T 157に切られる。

平面形・規模 西部は調査区外であり、東部も大部分を S T 157に切られ、平面形・規模共に不明である。

主軸方位 N-6° -Eを測る。

覆土 黒褐色シルトを基本とする4層からなる。

壁・床面 地山を掘り込み、斜めに立ち上がる。カマド周辺に炭化層が広がる。

柱穴 S T 157との境に1つ検出。

カマド 北辺東部に位置するが、大部分が調査区外にあたっている。

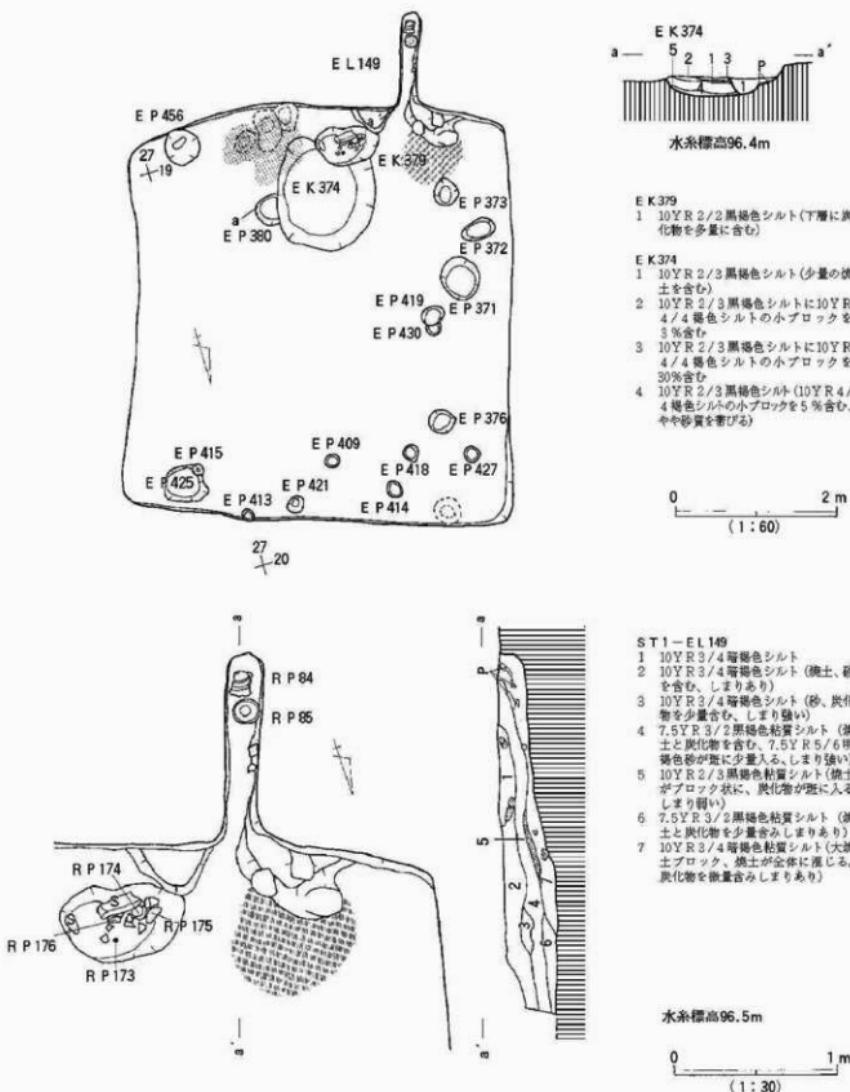
遺物の出土状況 床面より土師器壺 (82) が出土している。

S X 431土器捨て場（第14図）

26・27・20～22区に位置する。S T 186周辺および覆土に炭化層が広がり、炭化層上に多くの土器が出土した。これらは、S T 186埋没後にできた窪地に一括で捨てられた様相を示している。墨書き器（2・4・7・11・12・17・24）、転用硯（10）などが出土している。

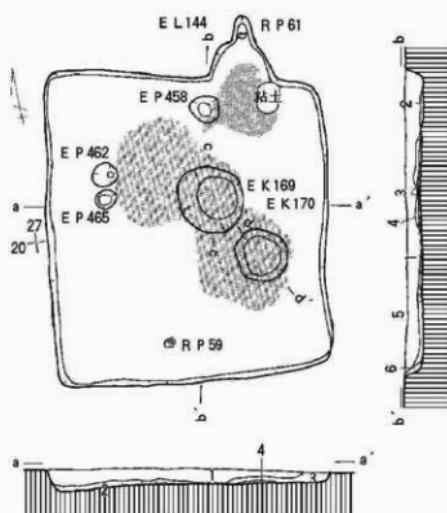
表1 積穴住居跡観察表

番号	主敷方位 (北極)	規模 (m)	深さ (m)	床面標 (m)	床面状況	壁	屋根	カマド	壁幅 (m)	天井 (m)	柱幅 (m)	ピット・貯蔵穴	出土遺物	備考	
S T 1 26・27- 18・19区	方形	N 16° E	5.1×4.5		22.9	周辺部 陥没	曲面	無	南西部 E L 149 無れ 無	120	30	140	E K 374, 379	カマド廻連先跡より 53, 57～60, E K 379より54～56, 134	S T 147, 162を切らる。 S T 150, 161を切る。
S T 3 22・19- 20区	方形	N 6° E	3.8×3.4	20	12.8	炭化層有 地盤	斜	無	北側東部 縦としらむ の所	80	70	不明	3 (E P 458, 462, 465) E K 169, 170	床から77, カマド廻 道から78, 覆土から 76	S T 147, 150, 161を切る。
S T 4 26・27- 18・19区	不規 方形	N 6° W	4.3×4.0	30	17.2	炭化層有 地盤	斜	無	無			1	床より44, 46～48, 115, 116, 覆土より 45	S T 1, 247, 351, 362, S G 171を切る。	
S T 5 27・28- 21・22区	方形	N 6° W	4.3×3.9	床まで15 底まで 20	16.8	床面標上に 炭化層有 地盤	曲面	有	無			5 (E P 125～ 129)	覆土より72	S G 171を切る。周辺下に E K 301。	
S T 190 26・27- 20区	不規 方形	N 14° E	4.5×4.5	20	20.3	炭化層有 地盤	斜	無	無			8	床より43	S T 166内 E P 321, 331, S K 325, S T 2に切られ る。	
S T 172 25・27- 19区	不規 方形	N 5° E		16		斜						6 (E P 191～ 196), E K 459	床より62, 64, 65, 覆土より61, 63	S T 157, S E 173に切られ る。	
S T 186 26・27- 20・22区	方形	N 14° E	5.7×5.3		30.2	炭化層有	不明	無	南西底部 E L 149 無れ 無	130	35	90	9 E K 318, 321, 331	床より118, 120, 122	カマド廻連底土に残存E K 311- 331 ST 171が切れる。S T 166 が残る。覆土から50の土器が出土
S T 2 26・27- 19・20区	方形	N 16° E	6.0×3.7	30		炭化層有	斜	無	南東底部 E L 148	140	30	不明	無	床より39～41, カマド 廻連先跡より305, 42, 覆土より54, 36～38	S T 3, 186に切られる。 北辺アラサ特出。
S T 94 25・26- 22・22区	方形	N 14° E	4.2×3.9	13			不明	斜	東邊部E L 143 無れE L 144	130	35	130	床より66～71	北辺アラサ不明。	
S T 147 26・27- 19区	方形	N 24° E	3.9×3.8	30	14.8	炭化層有	斜	無				3 (E P 167, 168, 169), E K 465	床より50～52, 111, 112, 122	S T 1, 160を切る。 S T 3, 4, 167に切られる。 S T 3に切られる。	
S T 150 25・26- 19区	方形	N 20° E		40		曲面			西辺中央部 E L 151 無れ 無	160	30	不明	床より49	S T 1, 141, S E, S P 410～412, 422を切る。	
S T 162 27・19区	不規	N 16° E		22		曲面	有							S T 1, 261を切る。 S T 3, 4, 167に切られる。	
S T 161 27・18区	不規	N 22° E		40		炭化層有	斜		北邊E L 155	120	25	不明	E K 451	床より79～81, 115	S T 1, 4, 161, S G 171 に切られる。
S T 157 26・19区	不規	N 12° E		45		炭化層有	斜		東邊E L 154	120	40	不明	無		S T 170, 179を切る。
S T 175 26・19区	不規	N 6° E		45		炭化層有	斜		北邊E L 154	不明	不明	不明	床より82		S T 157に切られる。



第4図 ST 1 竪穴住居跡・カマド

検出された遺構

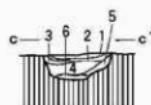


S T 3 (a-a')

- 10YR 2/3 黒褐色シルト (小粒の炭化物と土器片を含む)
- 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが20%混じる
- 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが20%混じる
- 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに10YR 2/3 黒褐色シルトの小ブロックが10%混じる

S T 3 (b-b')

- 10YR 2/3 黒褐色シルト (小粒の炭化物と土器片を含む)
- 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが10%混じる
- 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが20%混じる
- 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに炭化物が多い量に混じる
- 3と同じ
- 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに10YR 2/3 黒褐色シルトの小ブロックが10%混じる



E K169 (c-c')

- 10YR 3/3 黒褐色シルトと10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが3%混じり、やや鉄分を帯びる
- 10YR 3/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが20%混じる
- 10YR 3/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが5%混じる
- 10YR 3/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが30%混じる
- 4に10YR 2/1 黒色粘土の小ブロックが少量入る
- 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに10YR 3/3 黒褐色シルトの小ブロックが3%混じる

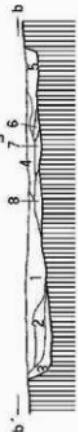
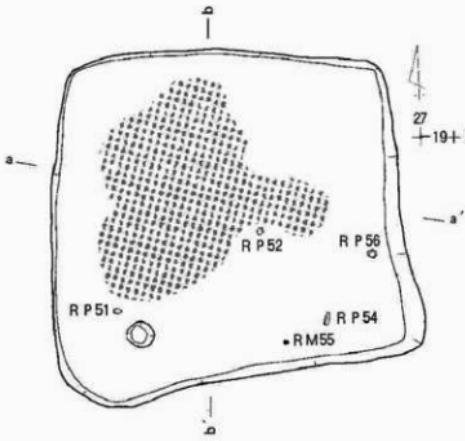
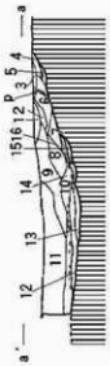
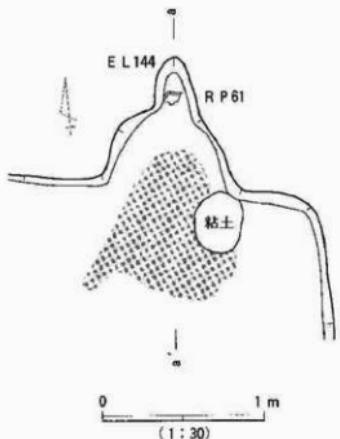
E K170 (d-d')

- 10YR 3/3 黒褐色シルトに10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロックが5%混じる (燒土を少量含む)
- 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに10YR 3/3 黒褐色シルトの小ブロックが30%混じる
- 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトに10YR 3/3 黒褐色シルトの小ブロックが5%混じる

水系標高96.5m

0 2 m
(1:60)

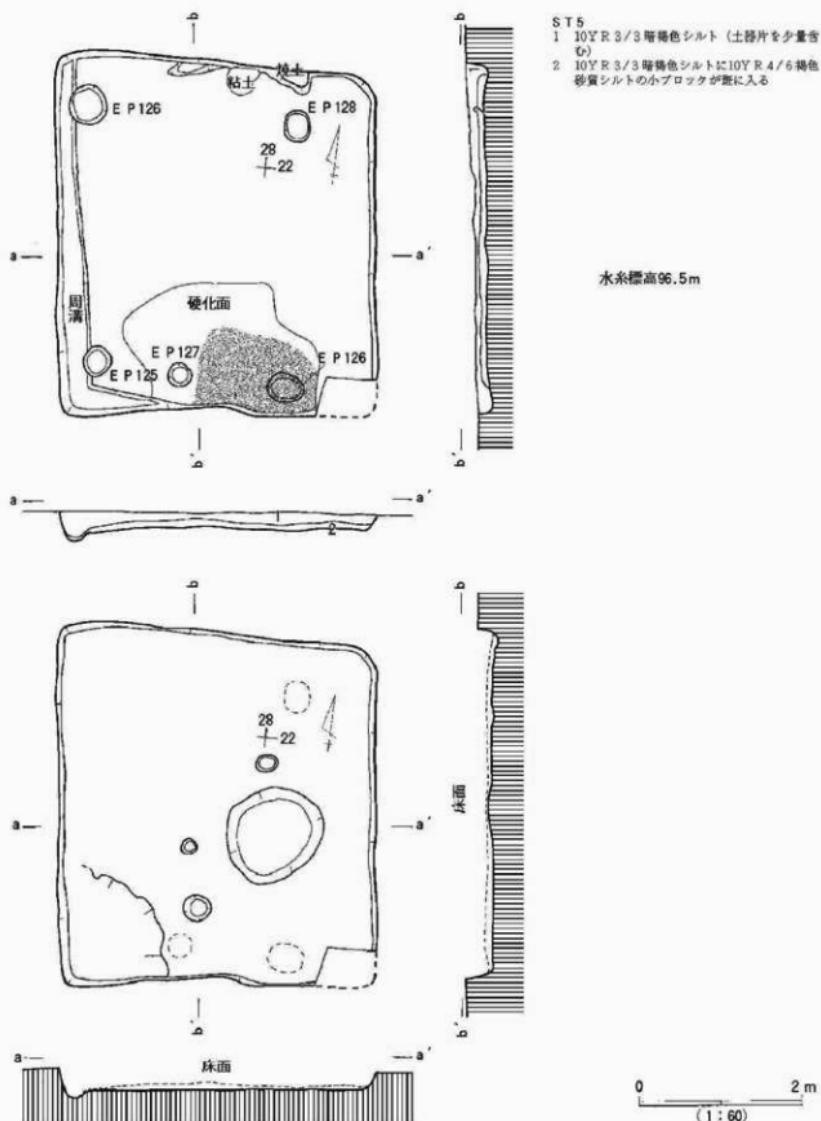
第5図 S T 3 穴穴住居跡



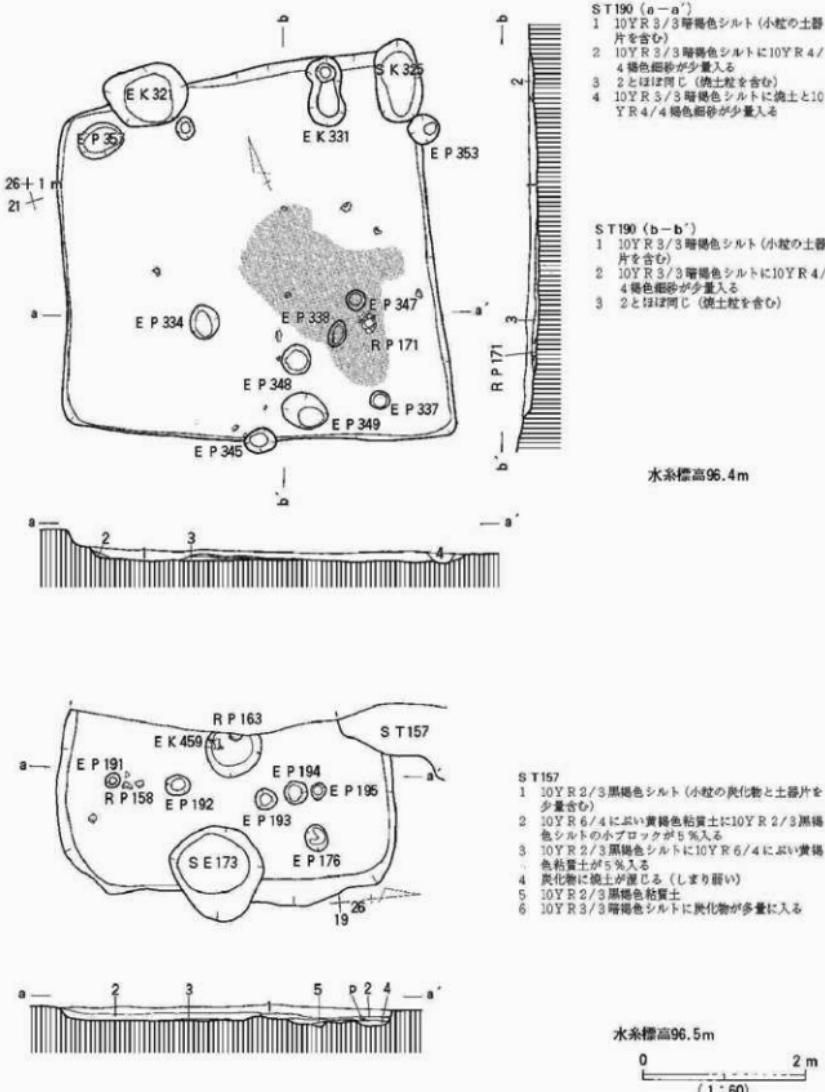
水系標高 96.5m 0 2m
(1:60)

第6図 ST 竪穴住居跡・カマド・ST 4 竪穴住居跡

検出された遺構

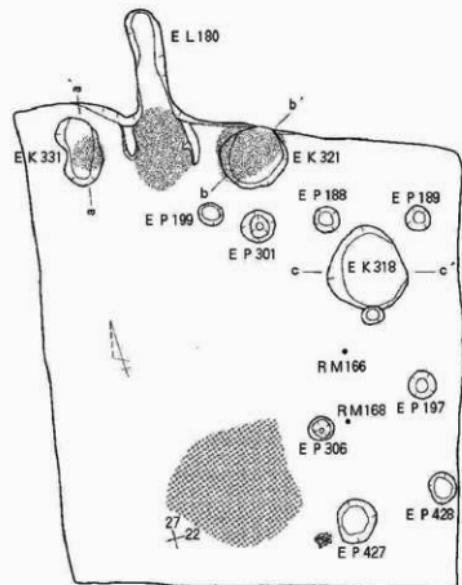


第7図 S T 5 竪穴住居跡、同點床除去後

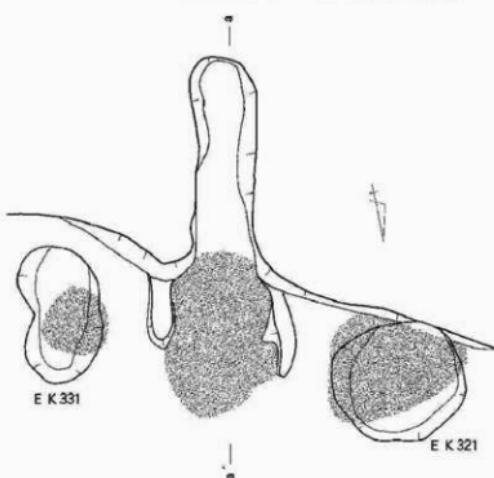


第8図 ST 190・ST 157竪穴住居跡

検出された遺構

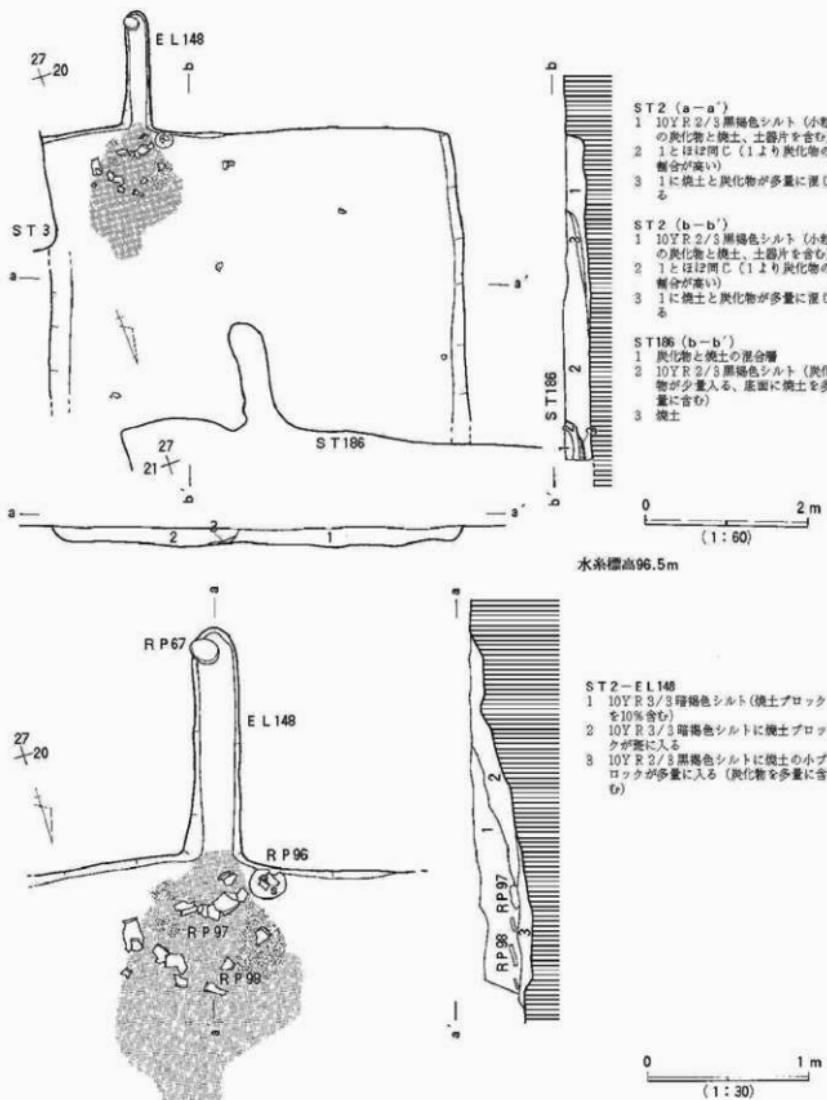


水系標高96.2m 0 2 m (1:60)



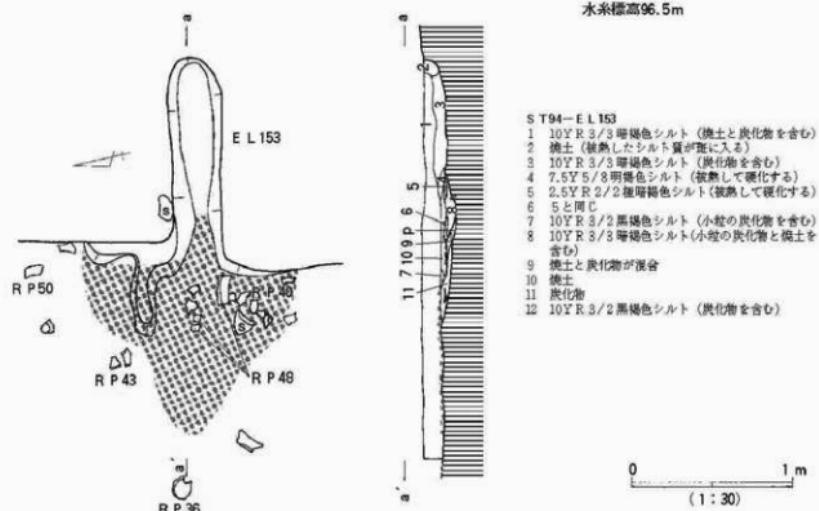
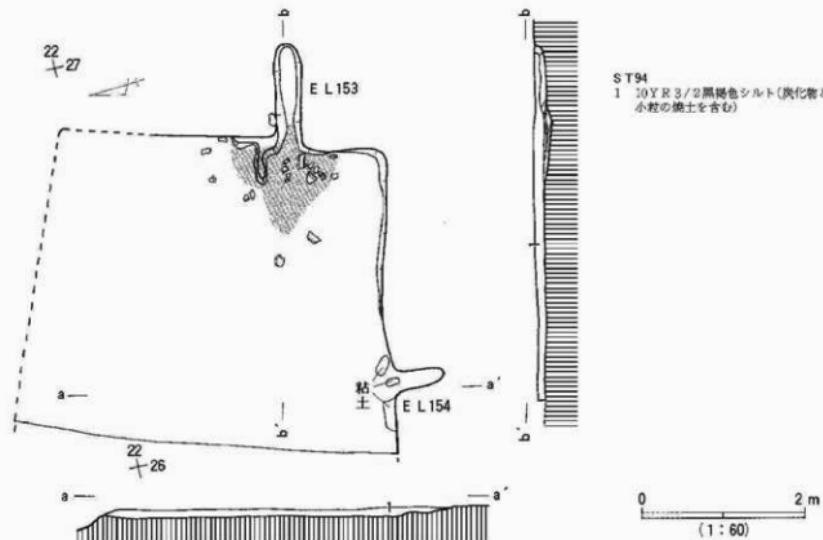
水系標高96.4m 0 2 m (1:60)

第9図 S T186竪穴住居跡・カマド

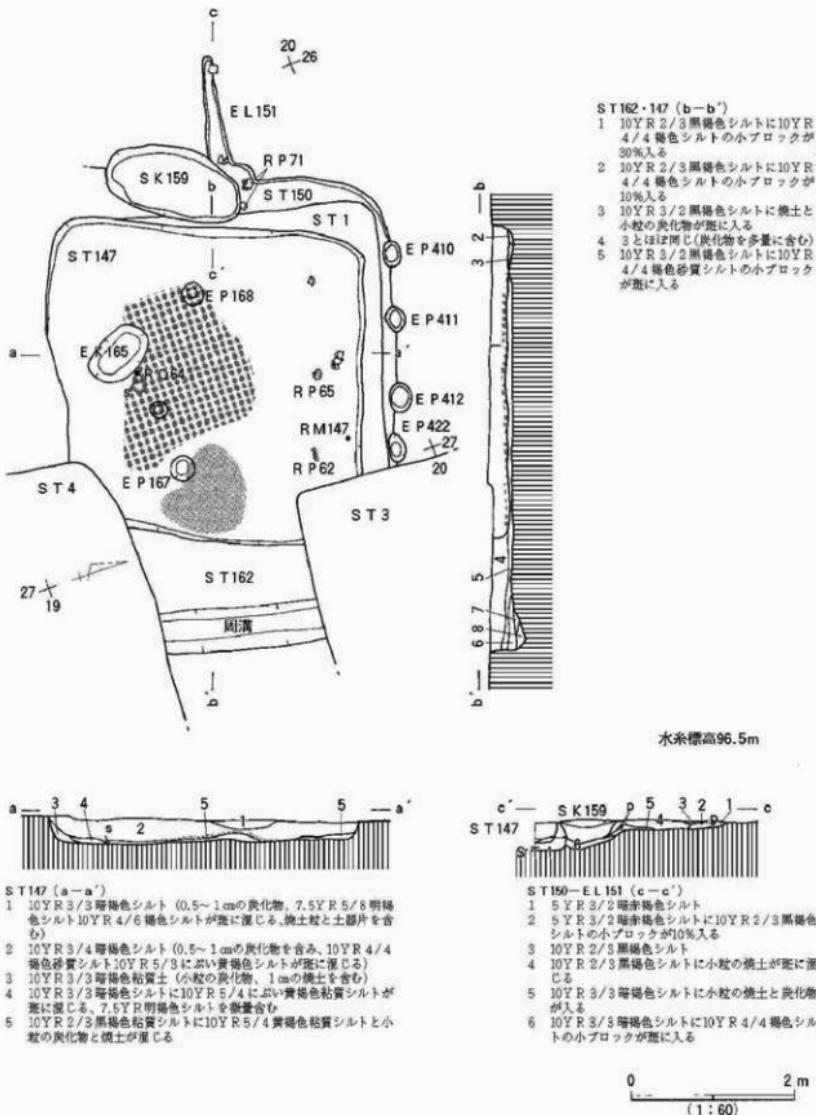


第10図 ST 2 竪穴住居跡・カマド

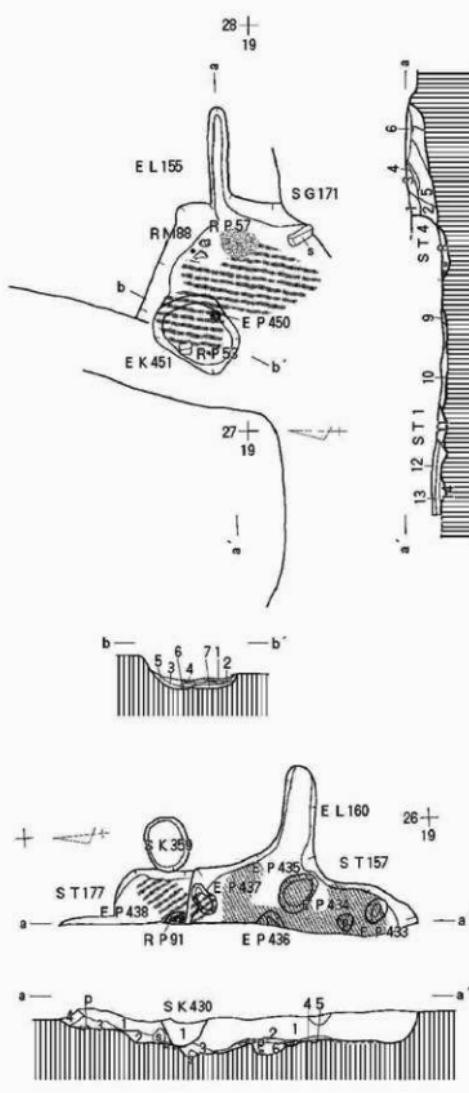
検出された遺構



第11図 ST94竪穴住居跡・カマド



第12図 S T 147・150・162竪穴住居跡



S T 161-E L 155 S T 1

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルトに10YR 4/4 黄褐色シルトの小ブロックが30%混じる
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルトに燒土の粒と炭化物が入る
- 3 燃土
- 4 10YR 3/2 黑褐色シルト
- 5 10YR 3/2 黑褐色シルトに燒土が多量に入る
- 6 10YR 3/2 黑褐色シルトに小粒の燒土が入る
- 7 10YR 3/2 黑褐色シルトに小粒の燒土と炭化物が入る
- 8 燃土層 (西壁に炭化物を含む)
- 9 燃土と10YR 2/2 黑褐色シルトが斑に混じる
- 10 10YR 2/3 黑褐色シルトに10YR 4/6 黄褐色砂質シルトの小ブロックが斑に混じる
- 11 10YR 2/3 黑褐色シルトと10YR 4/6 黄褐色砂質シルトの中ブロックが斑に混じる
- 12 10YR 2/3 黑褐色シルト
- 13 10YR 2/2 黑褐色シルトと10YR 3/4 墓褐色シルトの小ブロックが斑に混じる
- 14 6とほぼ同じ (やや粘る)

E K 451

- 1 10YR 2/3 黑褐色シルト (炭化物を少量含む上層が焼成して変色)
- 2 10YR 2/3 黑褐色シルトに10YR 3/4 墓褐色砂が斑に入る (炭化物と土器片が少量含む)
- 3 10YR 2/3 黑褐色シルトの小ブロックと10YR 3/4 墓褐色砂質と燒土粒が斑に入れる
- 4 10YR 3/3 墓褐色シルト
- 5 10YR 2/3 黑褐色シルトに10YR 2/2 黑褐色シルトの小ブロックが3%入る (やや砂質を帯びる)
- 6 10YR 4/4 墓褐色砂に10YR 3/4 墓褐色シルトの小ブロックが少量入る
- 7 10YR 3/4 墓褐色シルト (やや砂質を帯びる、小粒の炭化物を少量含む)

S T 179

- 1 10YR 2/3 黑褐色シルト
- 2 10YR 2/2 黑褐色シルトに10YR 4/4 黄褐色シルトの小ブロックが3%入る (土器片を少量含む)
- 3 10YR 2/3 黑褐色シルト (燒土粒を多量に含む)
- 4 3とほぼ同じ

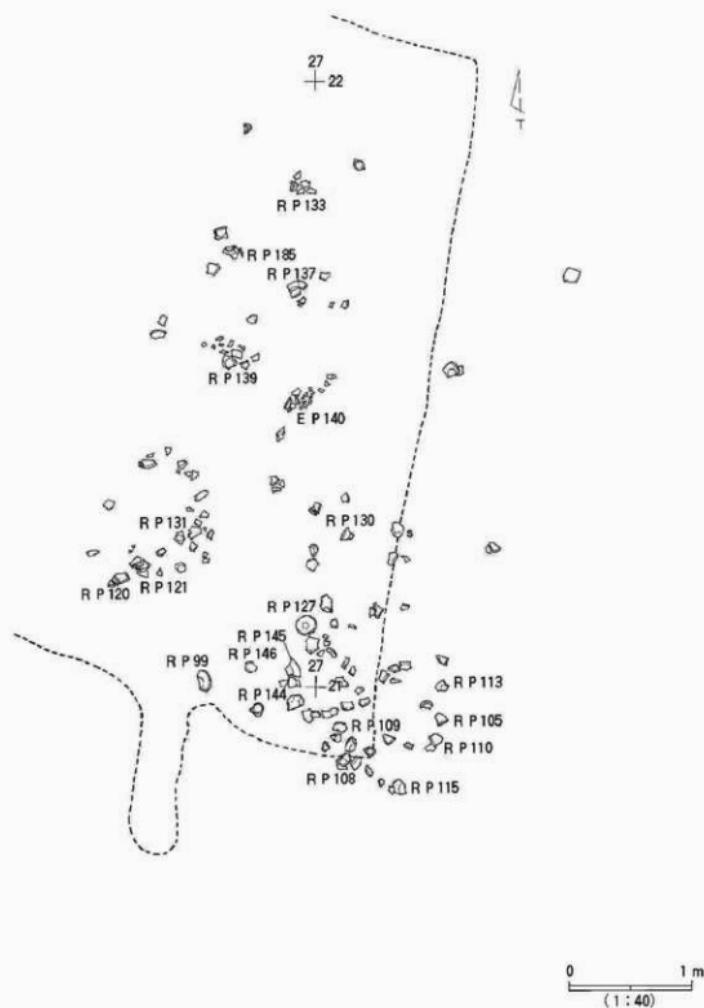
S K 430

- 1 10YR 2/2 黑褐色シルト (煙道を切る)

S T 157

- 1 10YR 6/4 に多い黄褐色粘土質土に10YR 2/3 黑褐色シルトが3%入る
- 2 10YR 2/3 黑褐色シルトに10YR 6/4 に多い黄褐色粘土質土が5%入る
- 3 10YR 4/4 黑褐色シルト (燒土粒を多量に含む)
- 4 燃土 (燒土が混じる (しまり弱い))
- 5 10YR 2/3 黑褐色粘土質土
- 6 10YR 2/3 黑褐色シルトに炭化物が多量に入る

第13図 S T 161・179・157竪穴住居跡



第14図 S X431土器捨て場

2 井戸跡

今回の調査で検出された井戸跡は、総計14基を数え、A区のS D235溝跡の周りに分布している。どの井戸跡も素掘りの井戸跡で、下半が膨らんだ形状を呈するものが多い。

S E 281井戸跡（第16図）

21-16区に位置する。平面形状は長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.1mを測る。南壁下部で壁面の崩落があり、南側に抉れが見られる。覆土は4層からなり、黒褐色のシルトを基調とする。1層に炭化物と焼土を含み、下層ほど粘性が強くなる。最下層には、黄褐色の地山ブロックの混入が見られる。覆土から平安時代の土師器片が出土している。

S E 247井戸跡（第16図・図版2）

21-15区に位置する。平面形状は長軸1.9m、短軸1.8mの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.1mを測る。覆土は6層からなり、暗褐色のシルトを基調としている。各層で褐色の細砂と炭化物の混入が見られ、最下層は粘性が強くなる。覆土から平安時代の土師器片や須恵器の壺の体部が出土している。

S E 276井戸跡（第16図）

21-14区に位置する。平面形状は直径1mの円形を呈し、確認面からの深さは0.7mを測る。今回検出された井戸跡の中では最小の規模である。底面より常時湧水が見られ、調査期間中も水が貯まっていた。覆土は4層からなり、暗褐色のシルトを基調としている。2層に炭化物の混入が認められ、下層ほど粘性が強い。覆土からの遺物の出土はなかったが、覆土の色調が他の井戸跡と似ていることから平安時代のものと考えられる。

S E 215井戸跡（第17図）

22-17区に位置する。東側半分が調査区外のため西側だけの検出である。検出した部分から推定される平面形状は、長軸1.7m、短軸1.4mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1.1mを測る。覆土は6層からなり、黒褐色のシルトを基調として、にぶい黄褐色の地山の混入が認められる。下層に行くほど粘性が強く、最下層は黒色の粘質土である。北壁下部で壁面の崩落による抉れが確認できる。遺物の出土はなかったが、平面形状及び覆土の色調が他の井戸跡と似ていることから平安時代のものと考えられる。

S E 201井戸跡（第17図）

22-18区に位置し、南側部分のみの検出である。検出された部分から推定される平面形状は、長軸1.6m、短軸1mの楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1mを測る。覆土は4層からなり黒褐色のシルトを基調とする。南壁下部で壁面の崩落があり抉れが確認できる。覆土から平安時代の土師器片が出土している。

S E 280井戸跡（第17図・図版2）

21-17区に位置する。北側半分が調査区外のため、南側のみの検出となる。平面形状は不明であるが、検出された部分から推定される平面形状は、直径1.3mの円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1.2mを測る。覆土は6層からなり、黒褐色のシルトを基調とする。上層で炭化物を少量含み、暗褐色砂質シルトの混入が認められる。下層ほど粘性が強い。東壁下部

に壁面崩落による抉れが確認できる。遺物の出土はなかったが、規模及び覆土の色調の類似等から平安時代のものと考えられる。

S E 284井戸跡（第18図）

21-16区に位置する。平面形状は直径1.6mの円形を呈し、確認面からの深さは1mを測る。覆土は6層からなり黒褐色のシルトを基調とする。1層は炭化物を含み、3層には焼土の混入が見られる。下層ほど粘性が強く、最下層で黄褐色の土壤の混入が見られる。覆土から平安時代の土師器片や須恵器片が出土している。

S E 273井戸跡（第18図・図版2）

20-15区に位置する。平面形状は直径1.6mの円形を呈し、確認面からの深さは1mを測る。覆土は暗褐色のシルトを基調とする5層よりなる。1層に小粒の炭化物の混入が認められ、2層にこぶし大の礫を多く含む。遺物の出土はなかったが、覆土の色調が他の井戸跡と似ていることから平安時代のものと考えられる。

S E 243井戸跡（第18図）

21-16区に位置する。平面形状は長軸2m、短軸1.7mの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.1mを測る。覆土は14層からなり、暗褐色のシルトを基調とする。土器片や炭化物の混入が認められる層もある。北壁下部に壁面崩落による抉れが認められる。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。

S E 214井戸跡（第19図）

22-17区に位置する。平面形状は直径1.4mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは1.2mを測る。覆土は5層よりなり、黒褐色のシルトを基調とする。1層に土器片を含み、下層ほど粘性が強くなる。壁面の崩落により下半が抉れた形状を呈する。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。

S E 244井戸跡（第19図）

21-16区に位置し、平面形状は直径1.7mの円形を呈する。確認面からの深さは、1.2mを測る。覆土は7層からなり、暗褐色のシルトを基調とする。3層と5層の間に厚さ4cmほどの炭化物の層が確認でき、2層から4層まで炭化物の混入が認められる。東壁下部に壁面崩落による抉れが認められる。遺物の出土はなかったが、規模及び覆土の色調の類似等から平安時代のものと考えられる。

S E 208井戸跡（第19図）

22-17区に位置する。平面形状は直径1.5mの円形を呈し、確認面からの深さは、1.2mを測る。覆土は6層よりなり、黒褐色のシルトを基調とする。1、2層に焼土と炭化物の混入が見られる。壁面の崩落と思われる黄褐色のやや粘質を帯びる4層が確認できる。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。

S E 268井戸跡（第20図・図版2）

21-14区に位置し、平面形状は長軸1.8m、短軸1.7mの楕円形を呈する。確認面からの深さは1.2mを測る。覆土は9層よりなり、暗褐色のシルトを基調とする。1層に炭化物の混入が

認められ、2～4層に黄褐色シルトの混入が見られる。下層に行くほど粘性が強い。下半に壁面崩落による抉れが認められる。遺物の出土はなかったが、規模及び覆土の色調の類似等から平安時代のものと考えられる。

S E 218井戸跡（第20図）

22-17区に位置し、長軸1.8mを測る。短軸はSK220土坑に切られるため断定できないが、推定で1.4mと考えられ、平面形状は楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは1.2mを測る。覆土は、黒褐色のシルトを基調とする8層からなり、褐色の細砂の混入が認められる。南壁中央に壁面崩落による抉れが認められる。遺物の出土はなかったが、覆土の色調が他の井戸跡と似ているため平安時代のものと考えられる。

3 土坑

S K 23土坑（第15図・図版2）

26-17区に位置し、平面形状は長軸1.4m、短軸1.2mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.5mを測る。壁は西側のみが急に立ち上がり、他は緩やかに立ち上がる。覆土は3層からなり、暗褐色のシルトを基調とする。全ての層に焼土と炭化物の混入が認められる。下層ほど炭化物の混入量が多く、全体的にしまりは弱い。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が出土している。SK24土坑を切る。

S K 24土坑（第15図・図版2）

26-17区に位置し、平面形状は1辺が1.9mの方形を呈する。確認面からの深さは、1.1mを測る。壁は4面ともほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ平坦である。覆土は1層で、暗褐色シルトに褐色砂質シルトの混入が認められる。全体的に炭化物と焼土の混入が認められ、均一な層であることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。底面より常時湧水が見られ、現地調査中も水が貯まっていることから井戸跡とも考えられるが、井戸枠の痕跡もなく、井戸跡と決定する要因に乏しい。SG171河川跡を切る。覆土から平安時代の土師器や須恵器の破片が多数出土している。

S K 220土坑（第20図）

22-17区に位置し、平面形状は、長軸1.5m、短軸1.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.4mを測る。覆土は2層からなり、1層は褐色の細砂である。2層は暗褐色のシルトで炭化物を少量含む。SE218井戸跡・SK221土坑を切る。覆土から平安時代の土師器片が出土している。

S K 221土坑（第20図）

22-17区に位置する。SK220土坑及びSE218井戸跡に切られ、全体が把握できないため、平面形状、規模、及び深さは不明である。覆土は1層の暗褐色のシルトで、土師器片を含んでおり、平安時代のものと考えられる。一部分だけの検出のため断定はできないが、北側の壁が緩やかに立ち上がっており、他の井戸跡とは明らかな違いが認められることから、土坑と推定している。

3 溝跡

今回の調査では7条の溝跡が確認されている。出土遺物から、古墳時代の溝跡が1条、平安時代の溝跡が6条である。古墳時代のものは、やや弯曲しながら南北方向に走る。これに対して平安時代のものは、いずれも東西方向に走っている。また、S D235・163溝跡は、昨年度の3次調査で検出された溝跡に連続すると考えられる。

S D429溝跡（第21図）

B区25-17~25-18区に位置し、南北方向に走る。幅0.3~0.5m、深さ0.4mを測る。壁は急に立ち上がる。覆土は暗褐色のシルトを基調とする3層からなり、黄褐色シルトの混入が認められる。底面から古墳時代（5世紀代）の土師器壺（96）が出土している。後述する平安時代の溝跡が東西方向に走るのに対し、このS D429溝跡はやや弯曲しながら南北方向に走っている。南北端は、他の遺構に切られて確認できないため、全体は不明である。S D40溝跡、SK23・24土坑に切られる。

S D40溝跡（第21図・図版1）

B区25-18~27-17区に位置し、東西方向に走る。幅0.5~0.9m、深さ0.3mを測る。覆土は暗褐色のシルトを基調とし、全体に褐色シルトの混入が認められ、下層ほどその混入量が多くなっている。壁は緩やかに立ち上がる。東西端が調査区外に伸びており全体をうかがうことはできないが、調査区の更に東西方向に伸びることが確認できる。覆土から平安時代の須恵器や土師器の破片が出土している。S D429溝跡を切る。

S D235溝跡（第22図）

A区21-17~23-16区に位置し、東西方向に走る。幅0.8~1m、深さ0.2~0.3mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色のシルトを基調とする2層で、黄褐色砂質シルトの混入が認められる。底面から平安時代の須恵器壺（92）が出土している。検出された位置、方向、規模などから考えて、昨年の第3次調査で検出された溝跡に連続すると考えられ、後述するB区で検出されたS D163溝跡に連続すると思われる。SD217溝跡を切り、SE280・281井戸跡、SK283土坑に切られる。

S D163溝跡（第22図）

B区25-15~27-15区に位置し、東西方向に走る。幅1.3~1.6m、深さ0.3mを測る。今回の調査で検出された溝跡の中では、最大規模の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。覆土は2層からなり、黒褐色のシルトを基調とする。上層で炭化物と土器片の混入が認められ、下層では黄褐色砂質シルトが混入する。底面で平安時代の須恵器壺（93）が出土している。検出位置、方向、規模などから考えて、A区で検出されたSD235溝跡に連続すると考えられる。更に東方に伸びることが確認できる。

S D282溝跡（第23図）

B区22-17区に位置し、東西方向に走っている。幅0.4~0.5m、深さ0.3mを測る。南側が一段深くなり、壁は急に立ち上がる。覆土は黒褐色のシルトで微量ながら黄褐色砂質シルトの混入が認められる。SD217溝跡を切り、SE218・213井戸跡に切られる。覆土からの遺物の出

土はなかったが、S E213井戸跡に切られることから平安時代のものと考えられる。

S D217溝跡（第23図）

A区21-17~23-17区に位置し、幅0.4~0.7m、深さ0.2mを測る。覆土は2層からなり、暗褐色のシルトを基調とし、黄褐色砂質シルトの混入が見られる。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。西側をS D235溝跡に、東側を213井戸跡に切られるため全体は不明である。検出された位置、規模、方向などから考えて、B区で検出されたS D18溝跡に連続すると考えられる。覆土からの遺物の出土はなかったが、S D235溝跡に切られることから平安時代のものと考えられる。

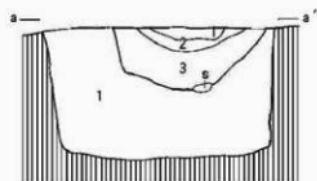
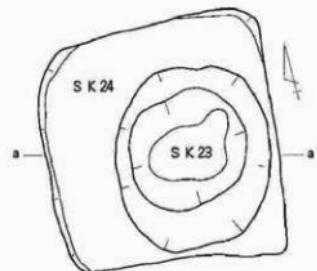
S D18溝跡（第23図・図版1）

B区25-16~27-16区に位置し、東西方向に走る。幅0.6~0.8m、深さ0.3mを測る。南壁は緩やかに、北壁は急に立ち上がり、溝の北側が一段深くなっている。覆土は、暗褐色のシルトを基調とする3層からなり、1層に土器片と炭化物が混入する。平安時代の須恵器杯(83)、須恵器高台付杯(85)、須恵器蓋(87)、土師器高台付杯(91)等が出土している。検出された位置、方向、及び規模などから考えて、A区で検出されたS D217溝跡に連続すると推測され、更に東方に伸びることが確認された。SK19土坑に切られる。

4 河川跡

S G171河川跡

B区北端及び、中央東側で砂の層の堆積を確認した。崩落の危険があるためトレンチを入れるだけの調査に留めたが、確認面から約50cmほどで湧水が見られた。一部分だけの検出のため断定はできないが、當時湧水が見られること、1m以上砂の堆積が確認できることから、河川跡と考えられる。また、2カ所で確認された河川跡が連続するものか否かは不明である。平安時代の須恵器高台付杯(97)、須恵器蓋(99)が出土している。SK24土坑、SD18・40溝跡に切られる。

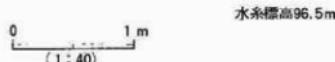


SK23

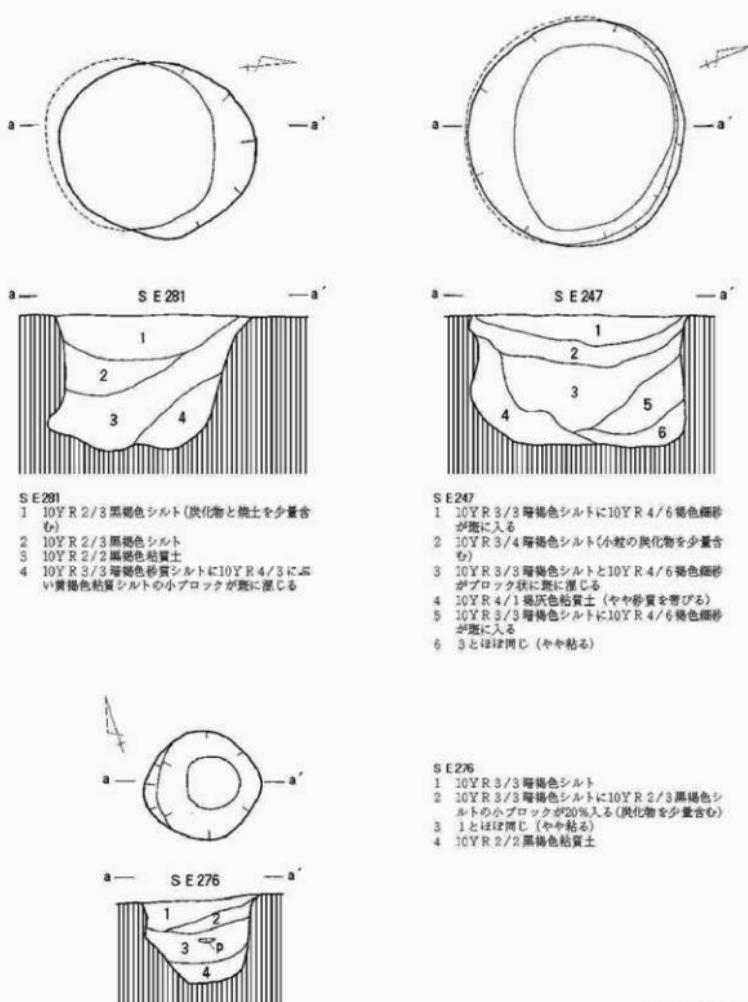
- 1 10YR 3/3暗褐色シルトに10YR 3/4暗褐色シルトの小ブロックを10%含む（小粒の炭化物を少量含む）
- 2 10YR 2/2黒褐色シルト（鐵土と小粒の炭化物を少量含む）
- 3 10YR 1.7/1黒色土（鐵土と炭化物が多量に入る、しまり弱い）

SK24

- 1 10YR 3/3暗褐色シルトに10YR 4/4褐色砂質シルトの小ブロックが斑に混じる（小粒の炭化物と鐵土の小ブロックを含む）

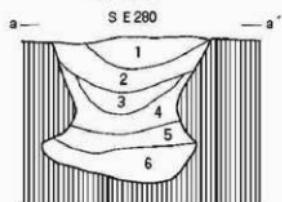
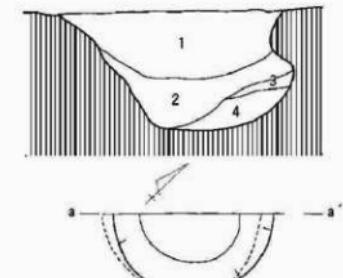
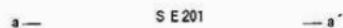
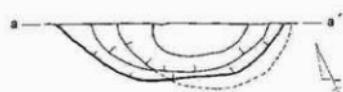
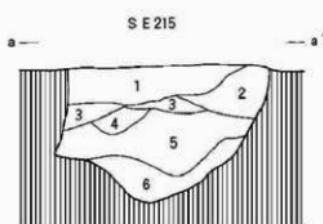


第15図 SK23・24土坑



第16図 S E 281・247・276井戸跡

検出された造構



S E 215

- 1 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 5/4 に近い黄褐色シルトの小ブロックが5%入る
- 2 1とはば同じ (小粒の炭化物を少量含む)
- 3 10YR 5/4 に近い黄褐色シルトに10YR 2/3 黒褐色シルトの小ブロックが3%入る
- 4 10YR 5/4 に近い黄褐色シルトと10YR 2/3 黒褐色シルトの小ブロックが既に混じる
- 5 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 5/4 に近い黄褐色シルトの小ブロックが3%入る (やや粘質を帯びる)
- 6 10YR 2/1 黒色粘質シルト

S E 201

- 1 10YR 2/3 黒褐色シルト
- 2 1とはば同じ (やや粘る)
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 5/4 に近い黄褐色シルトの小ブロックが3%入る
- 4 10YR 2/1 黑色粘質シルト

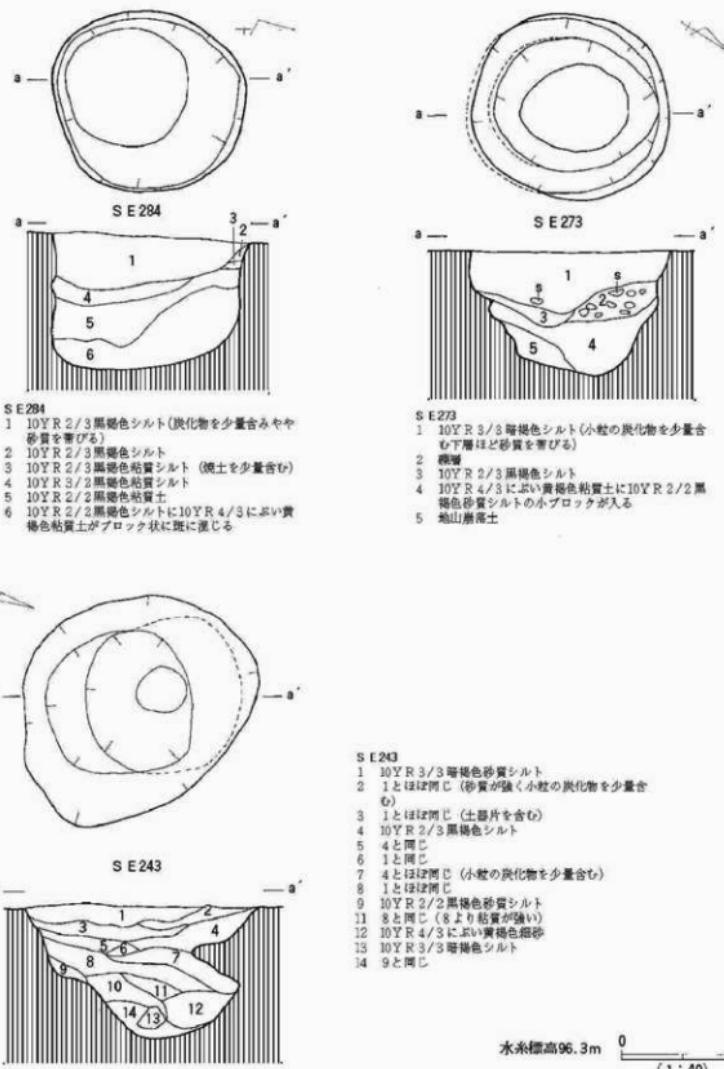
S E 280

- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト (炭化物を少量含む)
- 2 10YR 2/2 黒褐色シルトに10YR 3/3 黄褐色粘質シルトがブロック状に入る
- 3 2とはば同じ (10YR 3/3 黄褐色粘質シルトがブロック状に多量に入る)
- 4 1とはば同じ (やや粘る)
- 5 10YR 2/3 粘質シルトに10YR 3/3 黄褐色粘質シルトの小ブロックが既に混じる
- 6 10YR 2/2 黑褐色粘質土

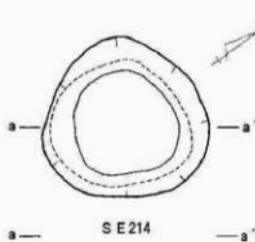
水系標高96.3m

0 1 m
(1:40)

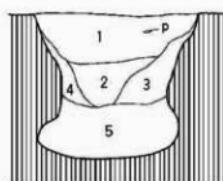
第17図 S E 215・201・280井戸跡



第18図 S E 284・273・243井戸跡

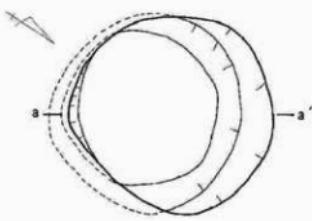


S E 214 — a — a'

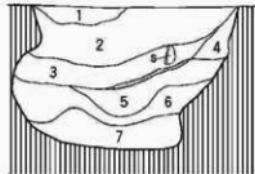


S E 214

- 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト (土器片を含む)
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルト (やや粘る)
- 3 10Y R 5/4 にぶい黒褐色シルトに 10Y R 2/3 黒褐色シルトの小ブロックが 3% 入る (やや粘る)
- 4 2 とほぼ同じ (粘質が強い)
- 5 10Y R 2/1 黒色粘質シルト

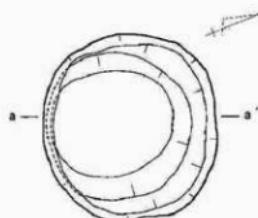


S E 244 — a — a'

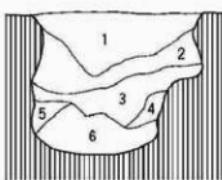


S E 244

- 1 10Y R 3/3 暗褐色シルト (やや砂質を帯びる)
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルト (小粒の炭化物と土器片を含む)
- 3 10Y R 2/3 黑褐色シルト
- 4 3 と同じ (少量の炭化物を含む)
- 5 3 と同じ (4より粘質が強い)
- 6 10Y R 4/1 暗褐色粘質土に 10Y R 4/6 黄褐色砂が層状に混じる
- 7 10Y R 4/1 暗灰色粘質土



S E 208 — a — a'

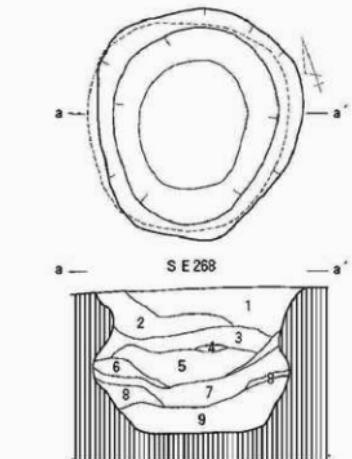


S E 208

- 1 10Y R 2/2 黒褐色シルト (炭化物と換土を少量含む)
- 2 1 とほぼ同じ (10Y R 4/6 黄褐色細砂を少量含む)
- 3 1 とほぼ同じ (やや粘る)
- 4 10Y R 2/2 黒褐色シルト (土器片を含む)
- 5 10Y R 3/2 黑褐色シルトと 10Y R 3/4 灰褐色砂質シルトがブロック状に斑に混じる
- 6 10Y R 3/2 黑褐色粘質土

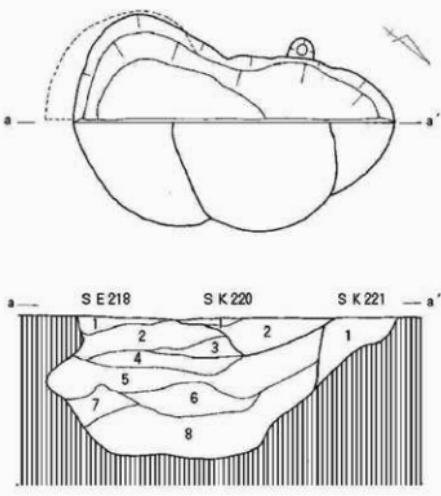
水系標高 96.3m 0 — 1 m
(1 : 40)

第19図 S E 214・244・208井戸跡



S E 268

- 1 10YR 3/3 増褐色シルト (小粒の炭化物を少量含むやや砂質を帯びる)
- 2 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 5/4 に似い黄褐色シルトの小ブロックが10%入る
- 3 10YR 2/3 黒褐色シルトに10YR 5/4 に似い黄褐色シルトの小ブロックが2%入る
- 4 10YR 4/3 に似い黄褐色粘質土
- 5 10YR 3/3 増褐色シルト (火山が崩落したものか)
- 6 10YR 4/3 に似い黄褐色粘質土
- 7 10YR 2/2 黒褐色粘質土
- 8 10YR 3/3 増褐色シルト (火山が崩落したものか)
- 9 10YR 4/1 増褐色粘質土

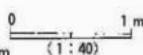


S K 220

- 1 10YR 4/6 増褐色細砂
- 2 10YR 3/3 増褐色シルト (炭化物を少量含む)
- 3 10YR 4/6 増褐色細砂
- 4 10YR 2/3 黑褐色シルトに10YR 4/4 増褐色細砂が混入する
- 5 10YR 3/2 黑褐色粘質シルトに10YR 4/4 増褐色細砂が混入する
- 6 10YR 3/2 黑褐色粘質シルトと10YR 4/4 増褐色細砂がブロック状に混入する
- 7 10YR 4/4 増褐色粘質シルト
- 8 10YR 3/4 増褐色粘質土

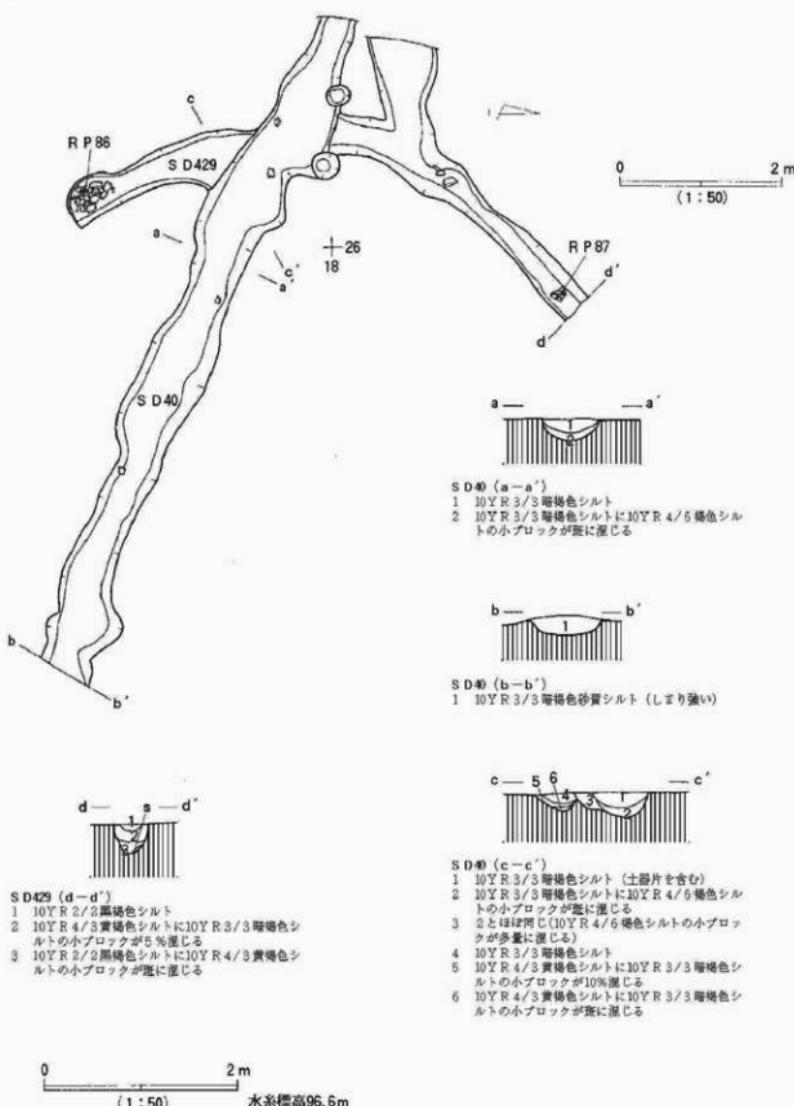
S K 221

- 1 10YR 3/3 増褐色シルトに10YR 4/6 増褐色細砂が少量混じる (土器片を含む)

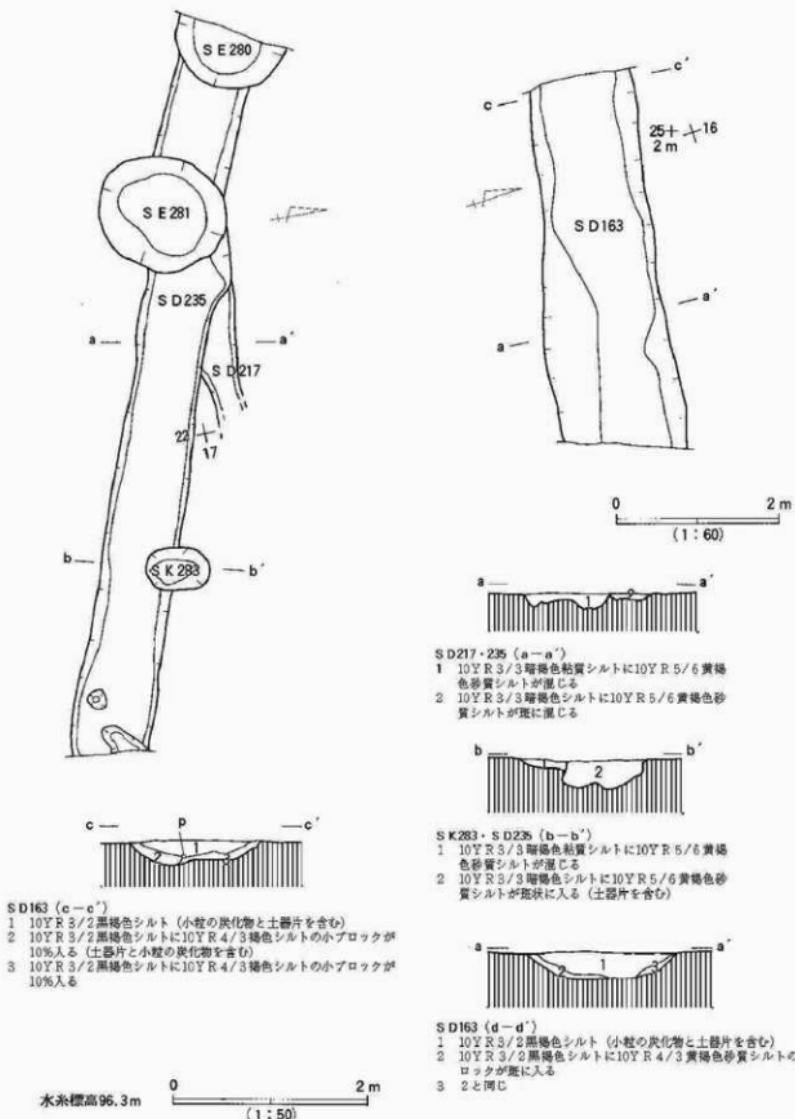
0  1 m
(1:40)

水系標高96.3m

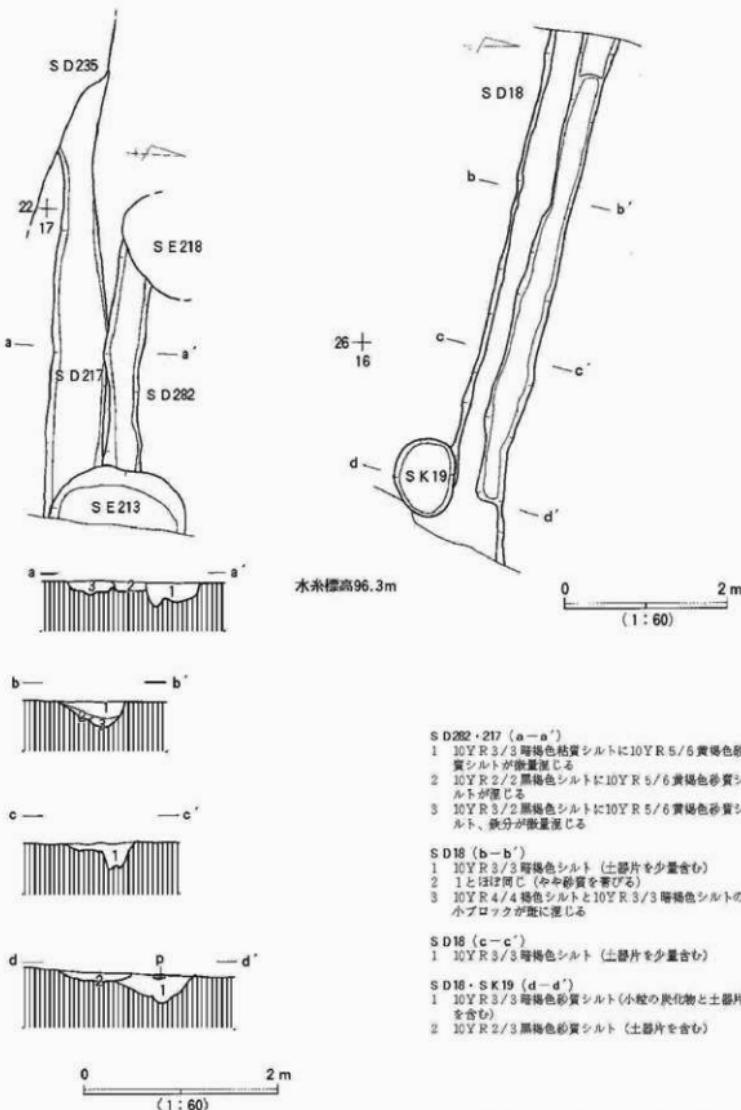
第20図 S E 268・218井戸跡・S K 220・221土坑



第21図 S D 40・429溝跡



第22図 SD 235・163溝跡



第23図 S D 18・217・282溝跡

V 出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ30箱である。破片での出土が多く、図化できたものは127点である。土師器・須恵器を中心とし、紡錘車や刀子などの鉄製品、砥石などの石製品が出土している。また、破片資料ではあるが弥生土器も十数点出土している。

1 平安時代

須恵器

須恵器は、図化できたものが43点である。主体をなすのは、供膳形態の壺類で29点を数える。底部切り離しが、回転糸切りによるものと回転ヘラ切りによるものとが見られ、いずれも無調整である。回転糸切りの壺は、器高指数（器高/口径×100）が30以上の値を示すものと、30未満の値を示すものに大別できる。体部や口縁部の形状から①体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの（4・9）②体部が直線的に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの（1・6）③体部が直線的に立ち上がり、皿状を呈するもの（76・83）がある。回転ヘラ切りの壺（97）は、1点出土している。破片資料のため全形は知り得ないが、口径に比して底径が大きいと推測できる。体部は内弯気味に立ち上がり、体部上部から口縁端部にかけて「く」の字状に外反している。

高台付壺は、底部切り離しが回転糸切りによるものと回転ヘラ切りによるものが見られ、いずれも無調整である。回転糸切りの高台付壺は、器高指数が40以上の値を示し、器高が高いことが特徴と言える。体部や口縁部の形状から①体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部分が緩やかに外反するもの（11・12）②体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部の外反が少なく口縁端部を丸く肥厚させ、外側に張り出させるもの（86）③体部から口縁端部まで直線的に立ち上がるるもの（74）がある。すべて回転糸切り痕を明瞭に残す。回転ヘラ切りによるもの（98）は、1点出土している。底径指数（底径/口径×100）が64という値を示し、口径に比して底径が大きい。体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。双耳壺は底部回転糸切りで、体部は内弯気味に立ち上がり、回転糸切り痕は不明瞭である。

皿（51）は、回転糸切りによる。器高指数が20、底径指数が50という値を示す。体部は直線的に立ち上がり、大きく外傾しつつ伸び、口縁部は大きく外反している。

蓋は、2点出土している。87は破片資料のため全形を知り得ないが、摘みが大きく天井部から肩部が回転ヘラケズリされている。99は無調整で広く扁平な天井部を持ち、肩部が内弯気味に伸びる。摘みが小さく、口縁端部は垂直に摘み出されている。

貯蔵形態の甕は、全てが破片資料のため全形を知り得ないが、61・62・79は、大型であろうことがうかがえる。打圧調整のタタキとアテの組み合わせは、平行タタキと平行アテ（62）と平行タタキと同心円アテ（61・79・93）がある。

土師器

土師器は、図化できたものは61点である。供膳形態の壺は、底部切り離しは回転糸切りが主流を占める。回転糸切りの壺は、器高指数がおおむね35前後の値を示す。体部と口縁部の形状

から①体部が内弯気味に立ち上がり、体部下端に凹線が施されたもの（55・91）②体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの（20・21）③体部が直線的に立ち上がり口縁部が僅かに外反するもの（15・63）がある。55・91は、底部外周から口縁部まで整形した後、体部下端に凹線を施し、体部と底部の境を明瞭にする意図がうかがえる。その後回転糸切りにより切り離しを行うが、その範囲は底部外周より5mmほど中に入ったところとなる。なお、91は内面黒色処理が施されている。72は、底部に網代痕が認められ、非クロクロ整形である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部が僅かに内反する。体部外面に手持ちヘラケズリ調整、内面にミガキ調整が施され黒色処理されている。

高台付坏は、底部切り離しが回転糸切りで、総じて底径が大きい。①体部が内弯気味に立ち上がり、口縁が引き出され僅かに外反するもの（22・23）②体部が内弯気味に立ち上がり、内面にミガキ調整が施され黒色処理されたもの（24・25）がある。

煮沸・貯蔵形態の壺は、完形ではなく破片資料での出土である。ロクロ整形の壺（33・69）は、外面がカキメ、ナデ調整が施されている。非クロクロ整形の壺は、内外面共ハケメ調整が施され、底部に網代痕や木葉痕が認められる（59・70）。煮沸形態の長胴壺（41・71）は、外面に縫位のハケメ調整、内面に横位のハケメ調整が施されている。堀（75）は、1点出土している。破片資料のため全形は知り得ないが、体部は内弯気味に立ち上がる。口縁部は「く」の字状に外反し、体部内外面共にハケメ調整が施されている。底部の形状は、丸底であったと推測している。

その他の遺物

今回の調査で出土した文字資料はB区より出土した墨書土器で、総数12点を数える。墨書される土器の器種は、須恵器坏4点、須恵器高台付坏4点、須恵器皿1点、土師器坏1点、土師器高台付坏2点である。出土遺構は、S X431土器捨て場より7点、堅穴住居跡より3点、溝跡より2点である。墨書される部位は、体部外面6点、底部6点である。墨書された字種は「十」7点、「不」1点、「木」1点、「十一？」1点、判読不能文字2点である。

石製品は3点出土している。109はS T162堅穴住居跡覆土から出土した砥石である。材質は、ディサイトに類似している。非常に堅く砥面が4面確認できる。小口が生きており、カワが付着している。断面は方形に近く、幅よりも厚みが大きい。その形状からは古代の様相がうかがえる。よく使い込まれ、砥面がなめらかである。手持ち用の中砥と思われる。110は26-19区の包含層から出土した砥石である。砥面が3面認められ、他面は打ち欠かれており、一部条痕が認められる。カワが付着していると思われる面があるが、破断面の可能性もある。材質は軟質で、奥羽山系に産する凝灰岩に類似している。手持ち用の中砥と考えられる。111はS T147堅穴住居跡覆土からの出土である。材質は110に類似しているが、110よりも軽く柔らかい感じを受ける。6面の面取りが施され、2カ所に穿孔が認められる。破片資料のため全形を知ることはできないが、孔に紐を通して使用する提げ砥の可能性が考えられる。しかし、砥面の面積が狭く、何らかの石製品の可能性も考えられる。

金属製品はB区を中心に16点出土している。紡錘車3点、刀子7点、鎌1点、性格不明5点である。出土した3点の紡錘車（112～114）はいずれも鉄製で、軸部が円盤部に差し込まれて

いる。残存する軸部の先端は鉤状である。刀子は6点出土している。破断面を観察すると、刀身の中心部分が空洞になっており、鉄板を折り返して作られたことがうかがえる。全て破損が見受けられ、全体の大きさを正確に把握することはできない。一部木部が残存するものもあるが、柄の部分か鞘の部分かは不明である。鎌(122)はS T 1堅穴住居跡覆土から出土している。その他にも5点の金属製品が出土している。いずれも鉄製であるが、破片のみの出土で全形を知り得ないため、種別を特定することはできなかった。

2 古墳時代

古墳時代の遺物としては土師器壺、甕、高壺、瓦泉の4点が出土している。以下に個別に記述する。95はS D429溝跡から出土した土師器壺である。胎土は細砂が混入するが焼成は良好である。丸底で体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外弯する。内外面共ハケメ調整が施されている。図上復元から推定される口径は140mm、器高は70mm程度である。

101はS K16土坑から出土した高壺である。壺部に段を有し、口縁部は緩やかに外反する。胎土は緻密でよく精製され、焼成も堅緻で橙色を呈する。内外面共ヘラミガキが施されている。脚部と口縁部に破損が認められる。図上復元から推定される口径は230mm、器高は120mm程度が考えられる。古墳時代中期（5世紀）のものと思われる。

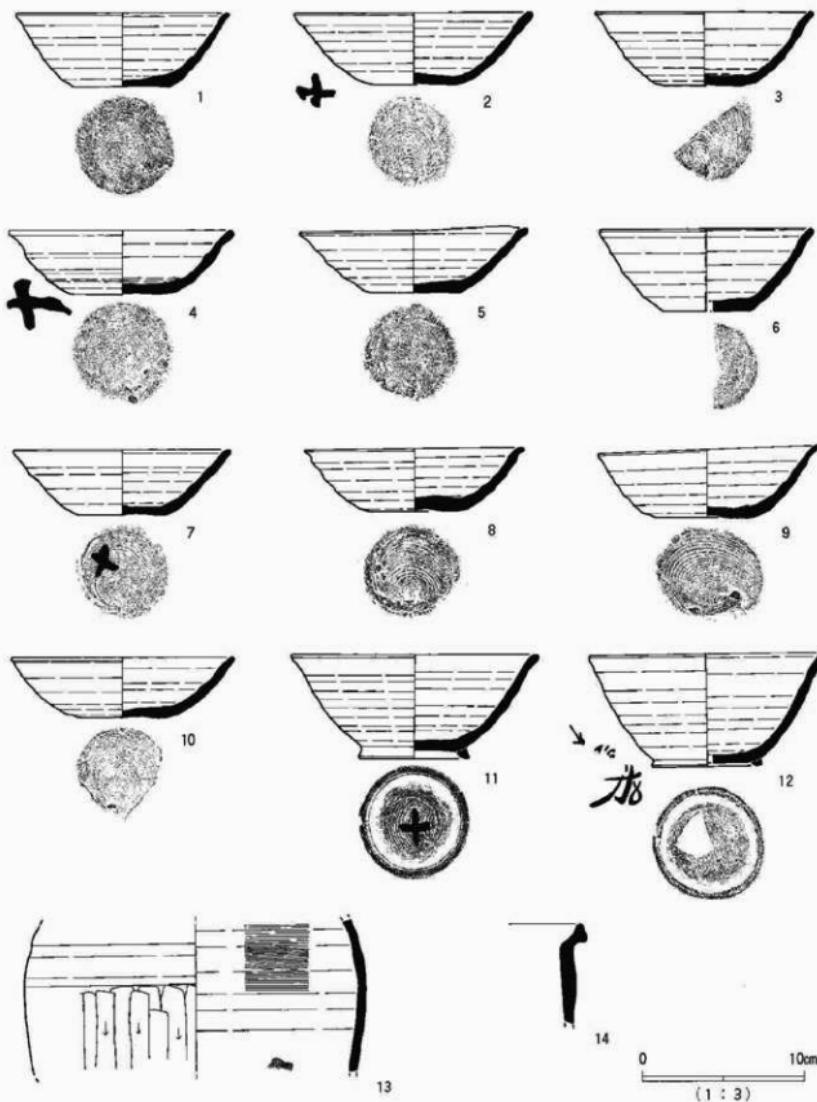
102はS X431土器捨て場から出土した、古墳時代中期（5世紀）に比定される甕である。S X431土器捨て場に、一括して廃棄された平安時代の遺物に混じって出土している。体部のみの破片資料のため全形は知り得ない。胎土には細砂が混入するが、焼成は堅緻である。体部には刻み目、横描波状文、沈線が認められ、これらが体部を巡ると考えられる。

96は、S D429溝跡から出土した甕である。口縁部から体部中央まで復元できた。体部内外面共ハケメ調整が施されている。口縁部内面は横位のハケメ調整が施され、口縁部外面は斜位のハケメ調整が施されている。古墳時代中期（5世紀）のものと思われる。

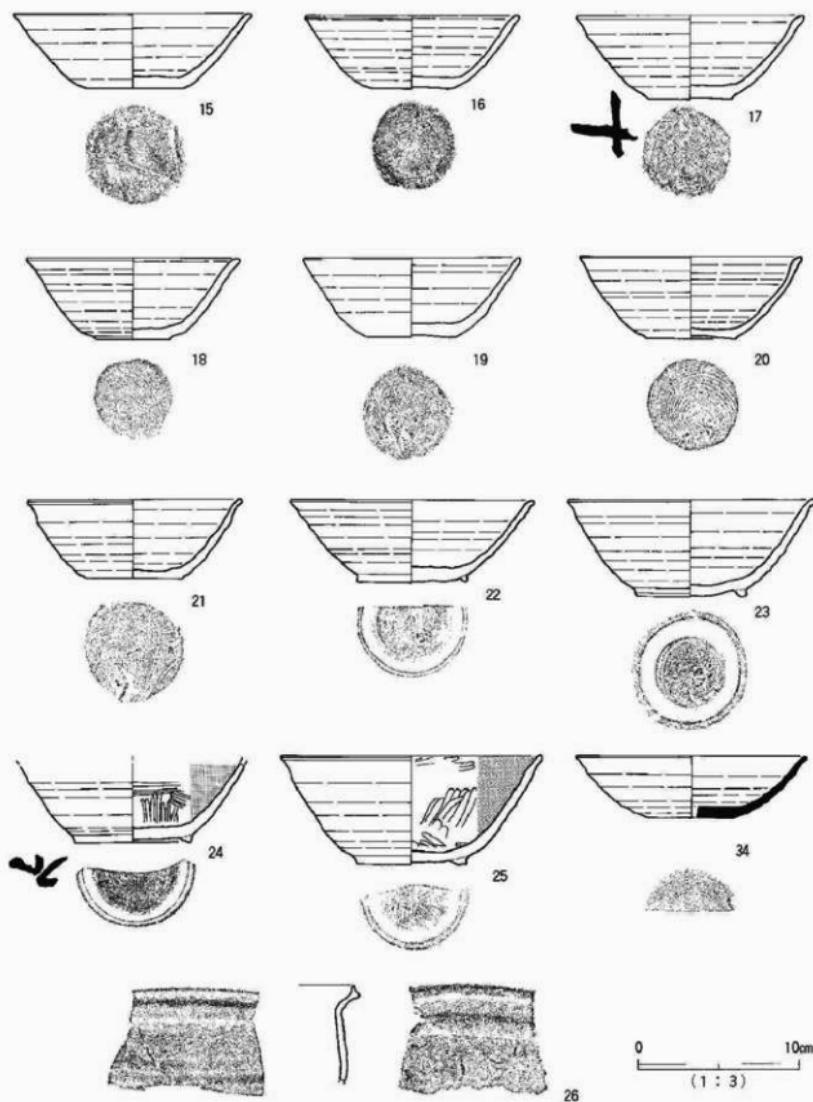
3 弥生時代

今回の調査では、10数点の弥生土器が出土している。いずれも破片による出土で、断面の摩耗が激しいこと、弥生時代と考えられる遺構が検出されていないことなどから、流れ込みの遺物と考えられる。復元できるものはなく全形は不明であるが、土器の形態には壺形、壺形、鉢形土器の3種が認められる。ここでは文様及び地文が良好に残り、時期を特定できるものについて個別に記述する。103はB区Ⅲ層から出土した壺である。外面にハケメ調整と半截竹管による連弧文が、内面にナデ調整が施されている。桜井式に比定される。104は、S T161堅穴住居跡覆土から出土した浅鉢である。外面に半截竹管による連弧文が施されており、桜井式に比定される。105は、B区Ⅲ層から出土した壺である。半截竹管による渦巻文が施されており、桜井式に比定される。106は、B区Ⅲ層から出土した壺の口縁部である。外面にR L斜の地文と竹管刺突文が施されており、天王山式に比定される。107は、S T156堅穴住居跡覆土から出土した壺である。外面にL Rの地文が認められる。刻目、沈線、刺突文が施されており、天王山式に比定される。108は、S T164堅穴住居跡覆土から出土した壺である。外面に撲糸しによる調整が施され、天王山式に比定される。

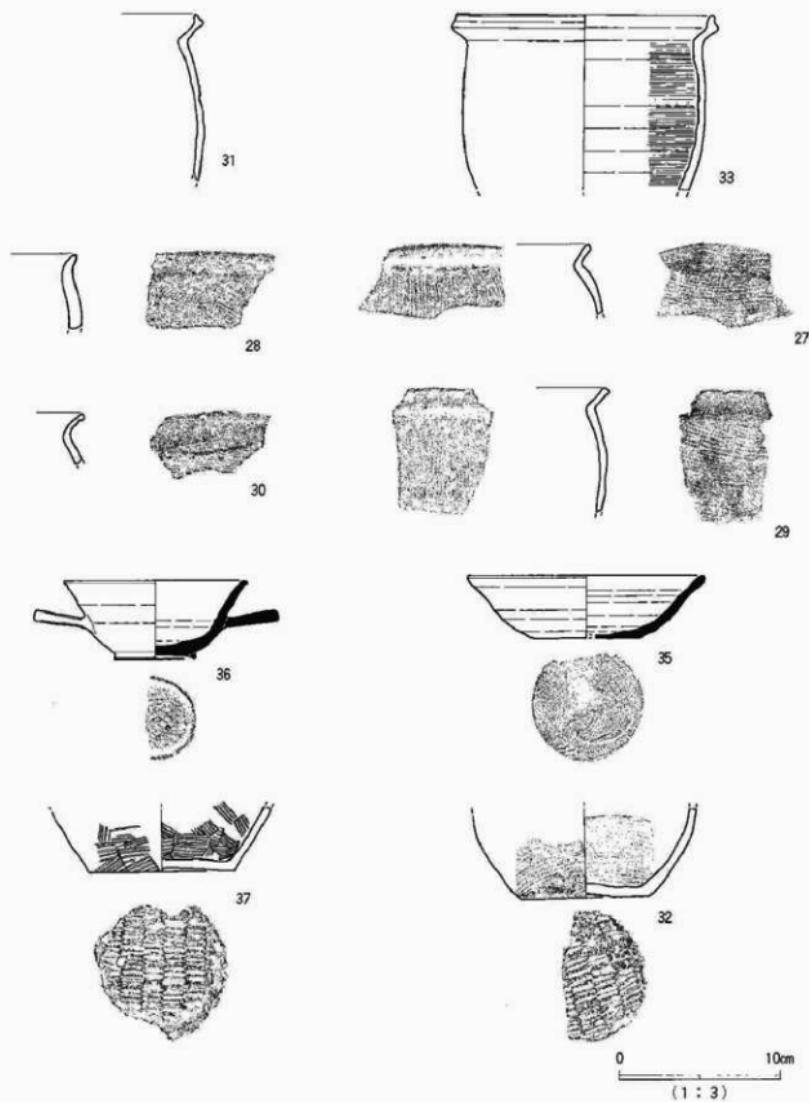
出土した遺物



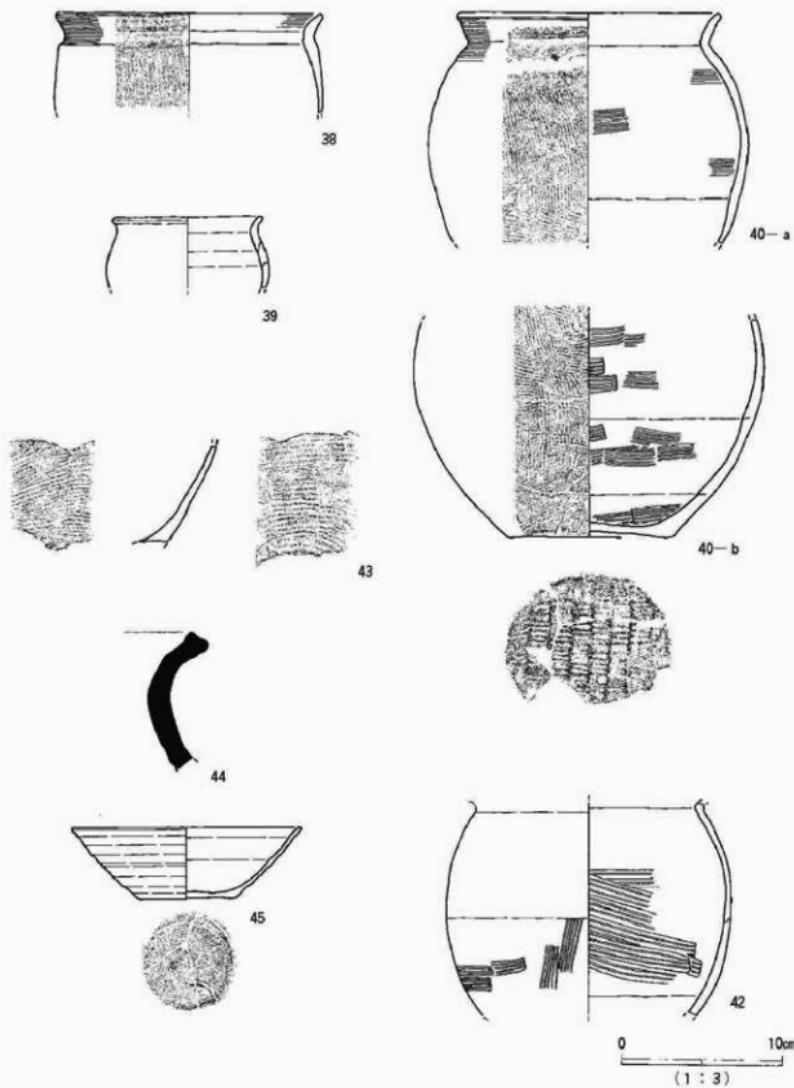
第24図 出土遺物 (1)



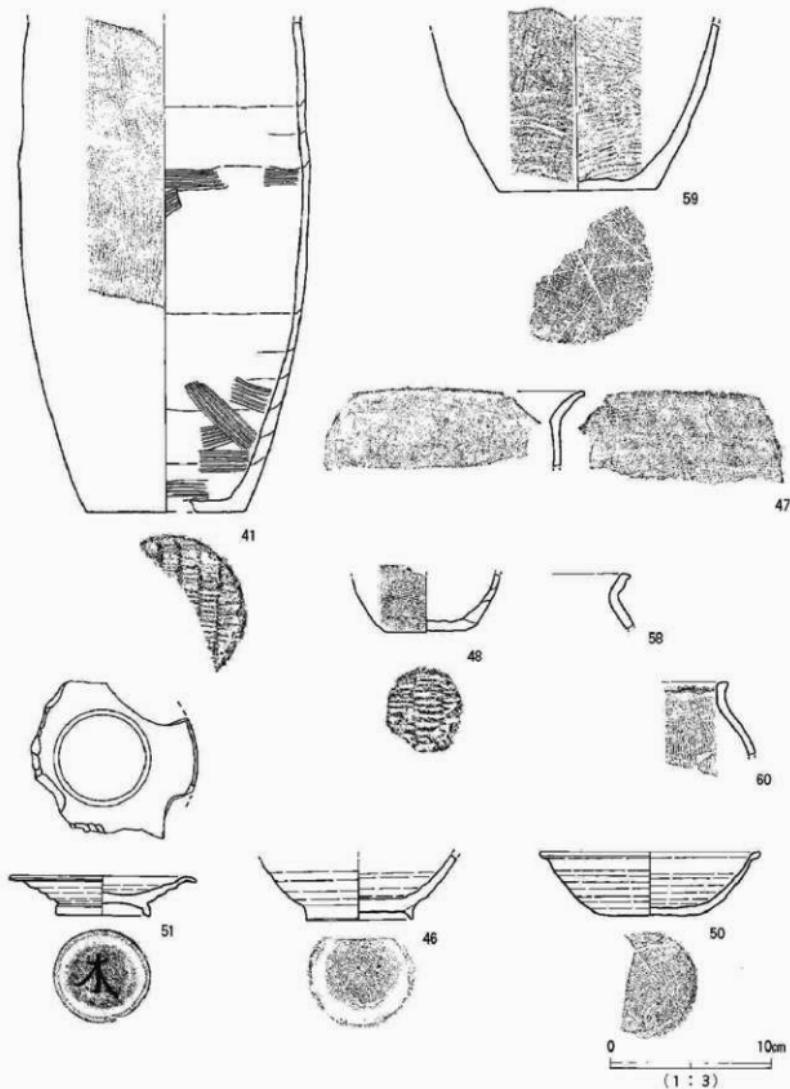
第25図 出土遺物（2）



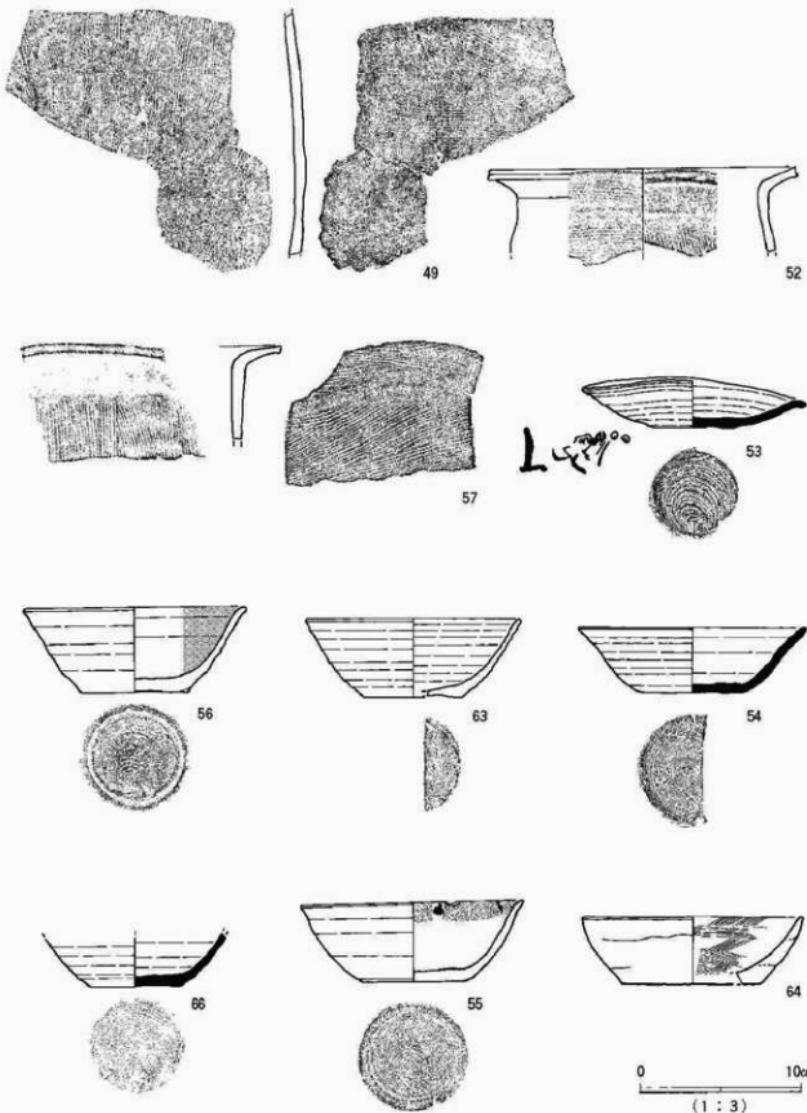
第26図 出土遺物（3）



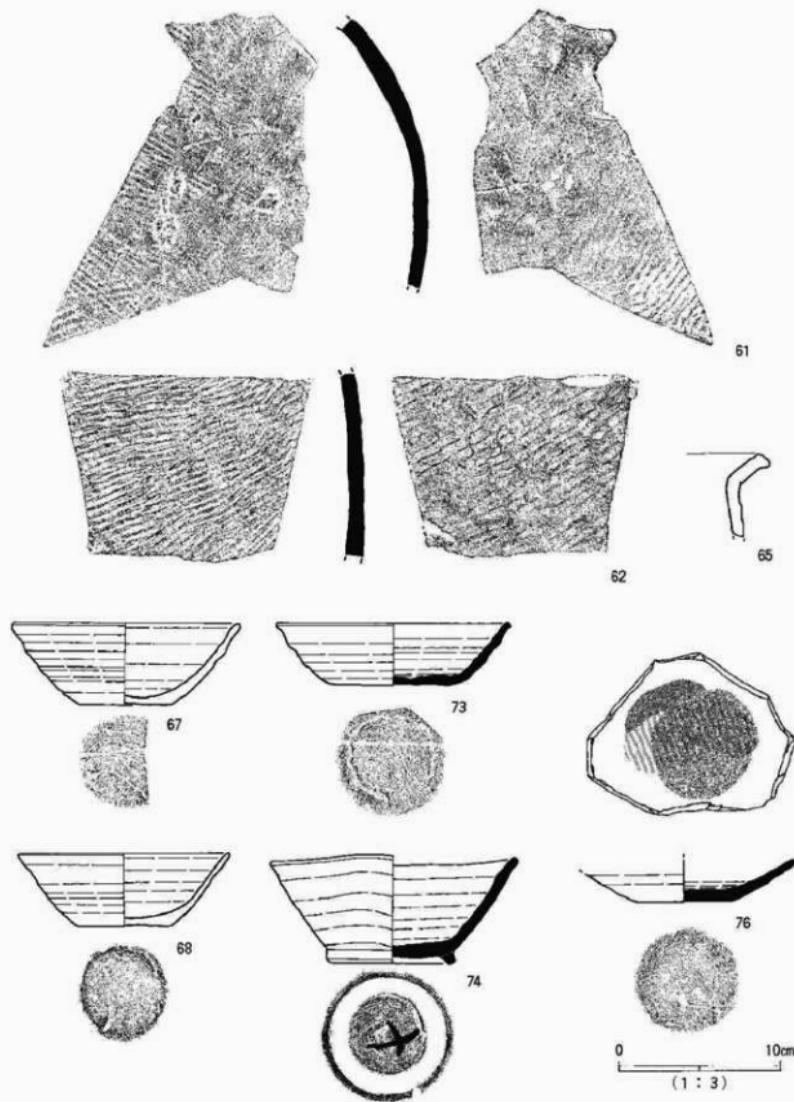
第27図 出土遺物 (4)



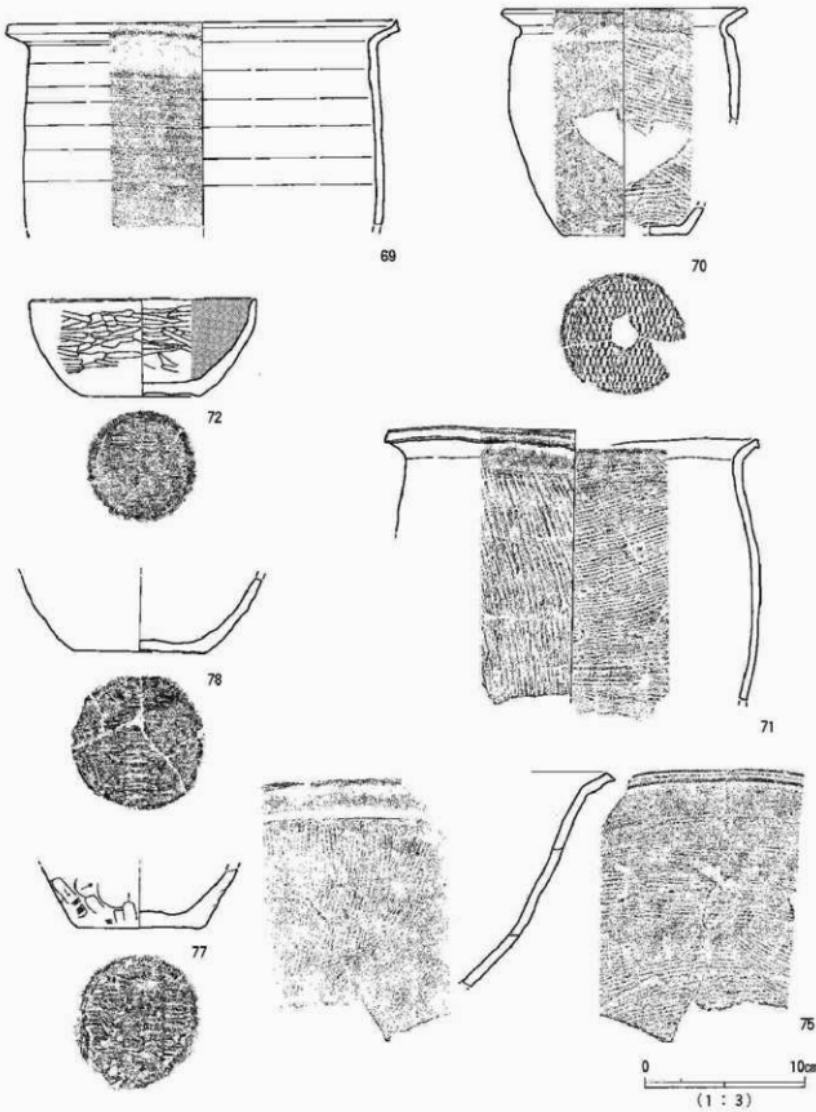
第28図 出土遺物（5）



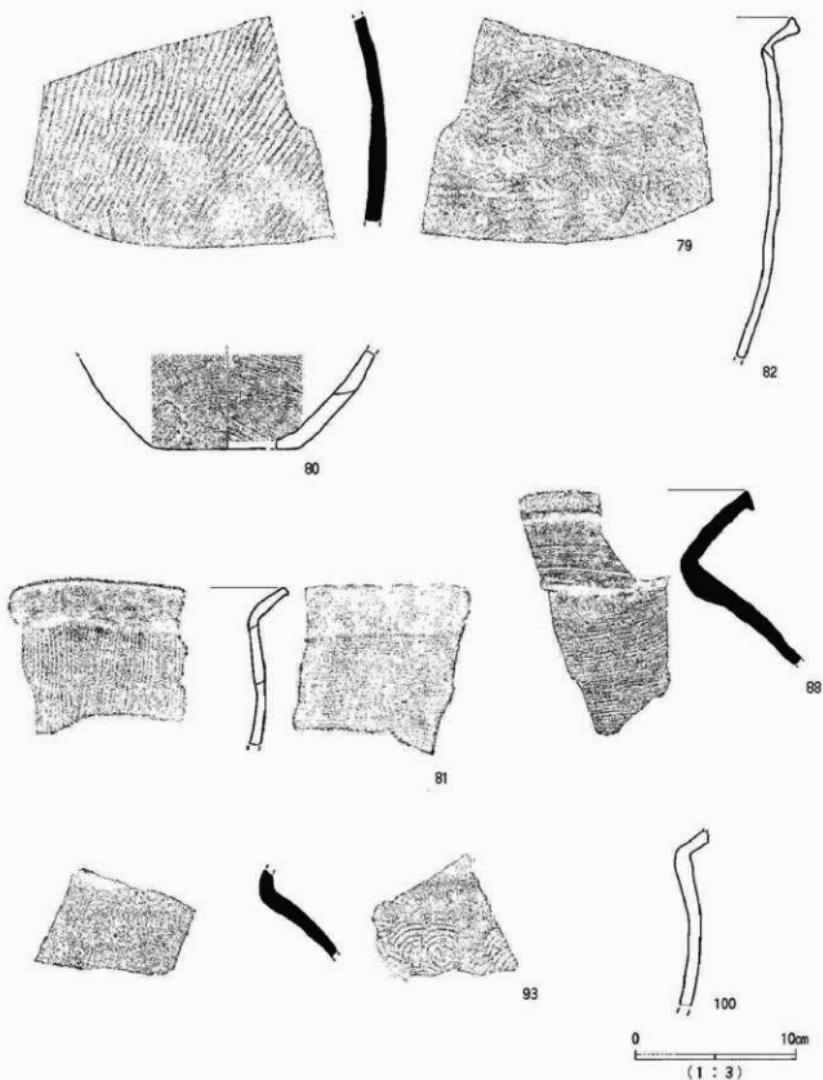
第29図 出土遺物（6）



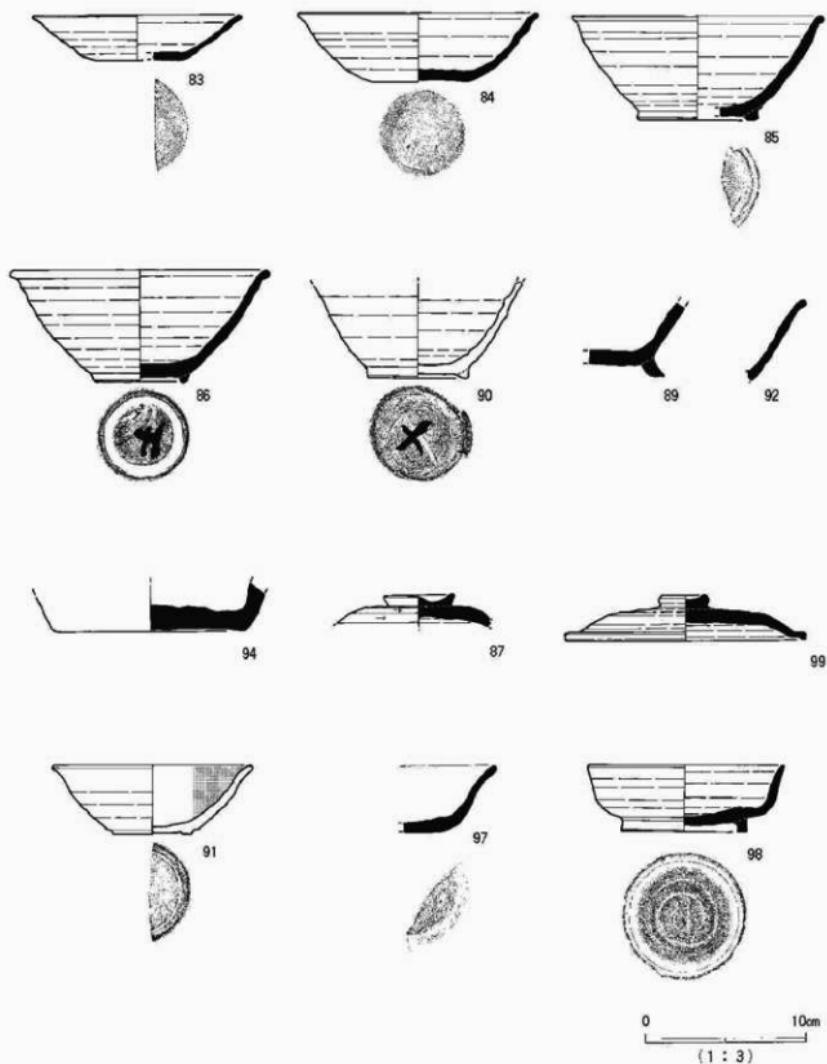
第30図 出土遺物 (7)



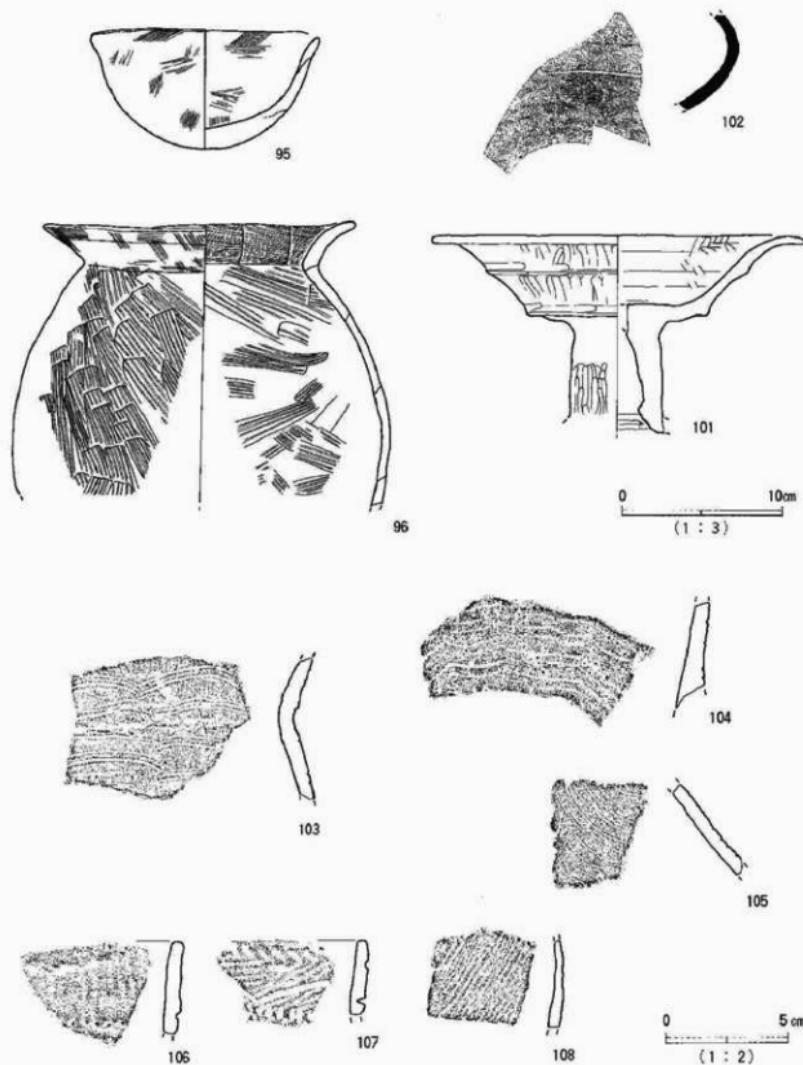
第31図 出土遺物 (8)



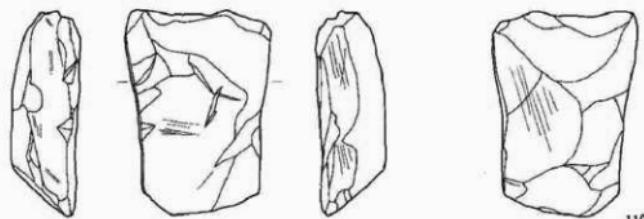
第32図 出土遺物（9）



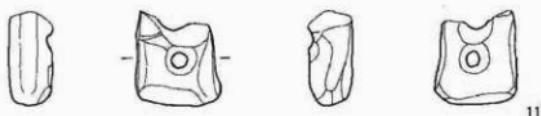
第33図 出土遺物 (10)



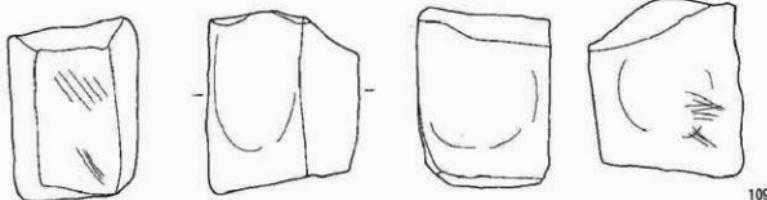
第34図 出土遺物 (11)



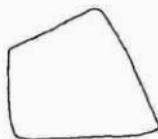
0 4 cm
(1 : 2)



111

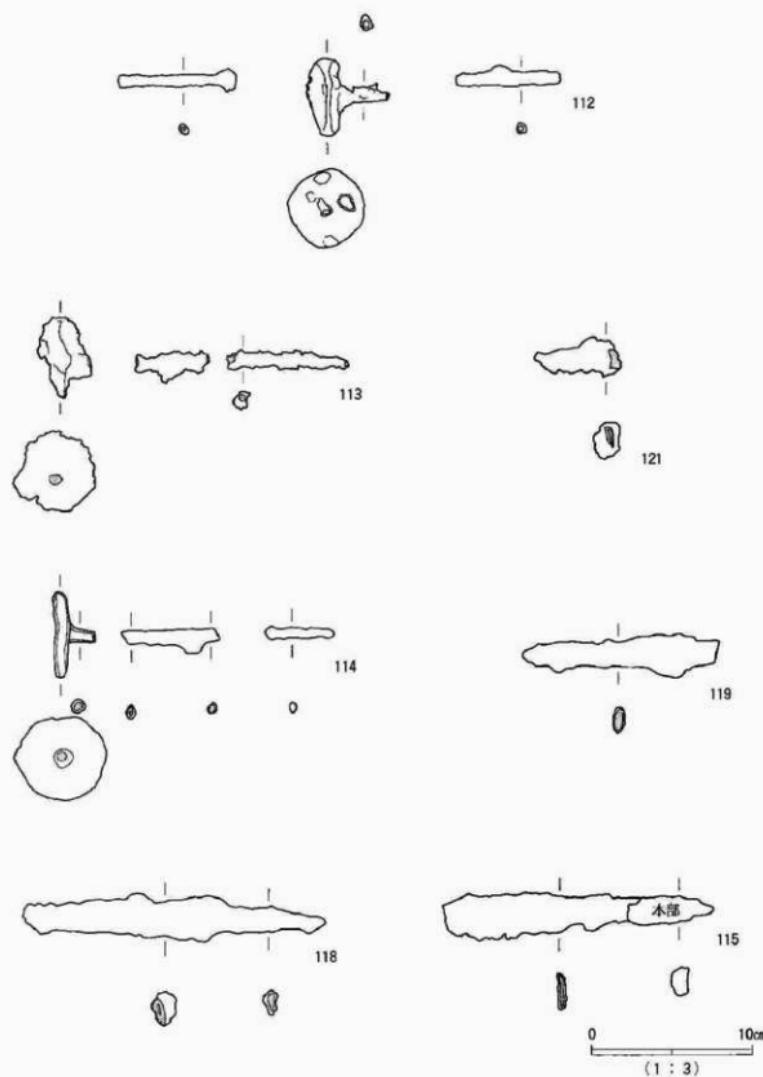


109

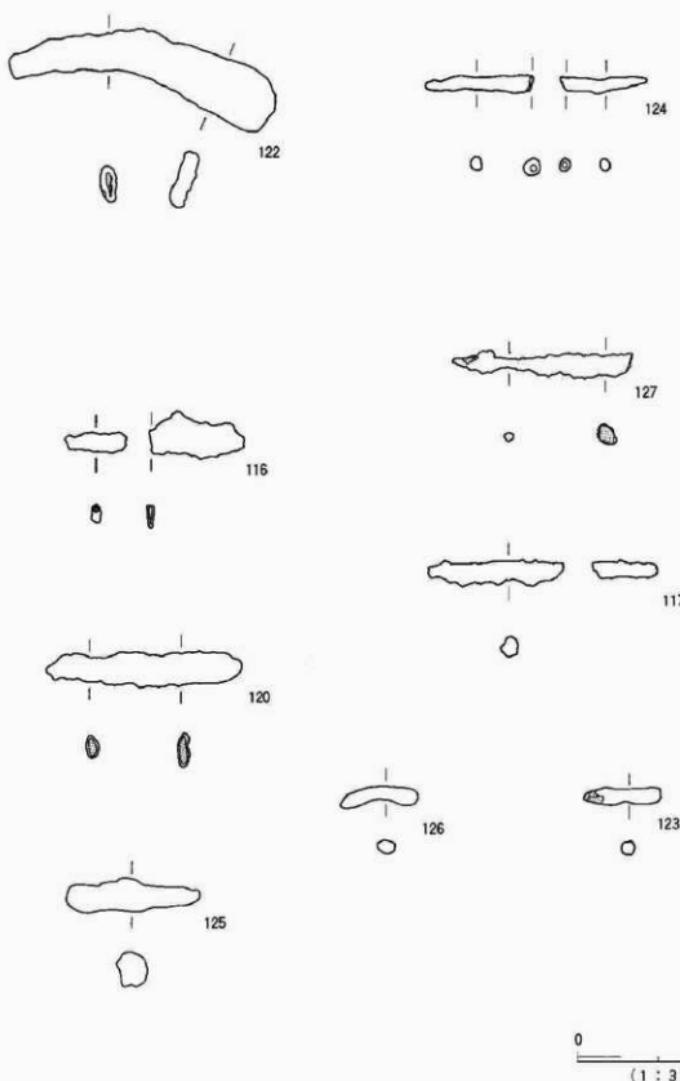


0 2 cm
(1 : 1)

第35図 出土遺物 (12)



第36図 出土遺物 (13)



第37図 出土遺物 (14)

表2 出土遺物観察表1

番号	種別	器種	計測値 (mm)	胎土	焼成	色調	成形			出土地点	備考
							内面	外面	底部		
1	須恵器	平	(132) 59 45	織部焼 滾鉢青釉	良	灰白色	け少ロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.126
2	須恵器	平	(146) 50 44	織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「十」玉 R.P.137
3	須恵器	平	(134) 53 45	織部焼 滾鉢青釉	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.107
4	須恵器	平	138 62 39	織部焼	良	オリーブ灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「十」ゆがみ R.P.127
5	須恵器	平	140 58 39	織部焼 滾鉢青釉	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.151
6	須恵器	平	(132) (83) 50	織部焼 滾鉢青釉	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	ゆがみ
7	須恵器	平	(134) 56 41	織部焼	良	オリーブ灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「十」玉 R.P.133
8	須恵器	平	138 52 38	織部焼	不良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	ゆがみ
9	須恵器	平	138 58 44	織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.165
10	須恵器	平	(136) (90) 39	織部焼 滾鉢青釉	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	ゆがみ 輪用破
11	須恵器	高台付平	(152) 66 64	織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「十」玉 R.P.135
12	須恵器	高台付平	(144) 68 65	織部焼	良	青灰色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「口」 R.P.121
13	須恵器	平		織部焼 滾鉢青釉	良	灰褐色	ロクロ ナラ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.125
14	須恵器	平		織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.150
15	土師器	平	(146) 60 46	織部焼 滾鉢青釉	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	ゆがみ R.P.99
16	土師器	平	131 51 45	織部焼	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「十」 R.P.144
17	土師器	平	140 53 51	織部焼	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.108
18	土師器	平	(130) 46 50	織部焼 滾鉢青釉	良	淡黃褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.103
19	土師器	平	134 55 49	織部焼	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.120
20	土師器	平	(137) 56 50	織部焼 滾鉢青釉	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.113
21	土師器	平	(132) 63 50	織部焼	良	にいい橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.264
22	土師器	高台付平	(160) 68 50	織部焼 青白 滾鉢青釉	良	橙色	け少ロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	南石荷子作のナテ明鏡 RP103
23	土師器	高台付平	(160) 64 60	織部焼 青白 滾鉢青釉	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.85
24	土師器	高台付平	(72)	織部焼	良	橙色	ロクロ 1.4cm	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	墨書「口」内裏無色処理 RP152
25	土師器	高台付平	(61) (67)	織部焼 滾鉢青釉	良	にいい橙色	ロクロ 1.4cm	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	内裏無色処理 RP.145
26	土師器	平		織部焼 青白 滾鉢青釉	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.160
27	須恵器	平	(141) (52) 38	織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 2 F	R.P.124
28	土師器	平	(78)	織部焼	良	にいい橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.166
29	土師器	平	(158)	織部焼	良	にいい橙色	ロナラ ナラ	ハケ少	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.146
30	須恵器	平	(145) (68) 38	織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 2 E L148	R.P.146
31	土師器	平		織部焼	良	橙色	ハケ少	ナダ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.151
32	土師器	平	(78)	織部焼	良	にいい橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	内裏無色付物説代役 RP125
33	土師器	平		織部焼	良	にいい橙色	ロナラ ナラ	ナダ	圓軸系切	SX431 土器輪て棒	R.P.110
34	須恵器	平	(145) (60) 48	織部焼	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 2 F	ゆがみ
35	土師器	平	(90)	織部焼	良	にいい橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	ST 2 F	時代末 R.P.262
36	土師器	平	(168)	織部焼	良	橙色	ナダ	ナダ	圓軸系切	ST 2 F	R.P.125
37	土師器	平	(91)	織部焼 露華	良	橙色			圓軸系切	ST 2 Y	R.P.141
38	土師器	平	(157)	織部焼 露華	良	橙色	ハケ少 ナダ	ハケ少 ナダ	圓軸系切	ST 2 Y	R.P.97
39	土師器	平	(100)	織部焼 露華	良	橙色	ハケ少 ナダ	ハケ少 ナダ	圓軸系切	ST 2 Y	時代末 R.P.97
40	土師器	平		織部焼 露華	良	橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	ST 2 E L148	R.P.67
41	土師器	平		織部焼 露華	良	橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	ST 2 Y	R.P.97
42	土師器	平		織部焼 露華	良	橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	ST 4 Y	R.P.51
43	土師器	平		織部焼 露華	良	橙色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	ST 4 Y	R.P.56
44	須恵器	平		織部焼 露華	良	兩色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 4 F	R.P.97
45	土師器	平	(142)	織部焼	良	淡黃褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 4 F	R.P.97
46	土師器	高台付平	68	織部焼 露華	良	淡黃褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 4 Y	R.P.52
47	土師器	平		織部焼 露華	良	淡黃褐色	ハケ少	ハケ少	圓軸系切	ST 4 Y	R.P.54
48	土師器	平	48	織部焼 露華	良	灰白色	ミナガ	ハケ少	圓軸系切	ST 4 Y	R.P.56
49	須恵器	平	(135)	織部焼 滾鉢青釉	不良	淡黄色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 147 Y	
50	須恵器	平	(115)	織部焼 滾鉢青釉	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 147 Y	墨書「木」 R.P.65
51	土師器	平	(142)	織部焼	良	橙色	ロクロ	ロクロ	圓軸系切	ST 1 E L149	R.P.94

表3 出土遺物観察表2

件名	種別	器種	計測値 (mm)			胎土	焼土	色調	成形			出土地点	備考
			口径	底径	高さ				内面	外面	底部		
65	土師器	壺	(96)	—	—	織物模	良	明褐色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 1 E L149	木箱 R P 84
66	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	灰褐色	ナデ	ハケヌナデ	—	ST 1 E L149	R P 84
49	土師器	壺	—	—	—	—	良	浅褐色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 150Y	R P 71
52	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	淡褐色	ハケヌ	ハケヌナデ	—	ST 147Y	R P 62
53	須恵器	平	131	54	33	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 1 E L149	郵用机 署印「口」 R P 85
54	須恵器	平	(140)	62	45	織物模	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 1 E K329	R P 125
55	土師器	平	136	67	50	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 1 E K329	付有文書 打出印? R P 174
56	土師器	高台付平	138	66	52	織物模	良	灰褐色	ミガキ	ロクロ	圓軸系物	ST 1 E K329	内面無色光澤 R P 126
57	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	淡褐色	ハケヌ	ハケヌナデ	—	ST 1 E L149	R P 84
62	土師器	平	(132)	(60)	48	織物模	良	浅褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 172Y	R P 361
64	土師器	盆	(134)	(63)	41	織物模	不良	褐色	ナデ	ナデ	—	ST 172Y	R P 368
66	須恵器	平	—	—	57	織物	良	灰色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 94Y	R P 80
61	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	オリーブ褐色	アラシ	ハケヌ	ロクロ	ST 172Y	R P 365
62	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	黑色	アラシ	タタキ	—	ST 172Y	R P 363
65	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	绿色	ロクロ	ロクロ	—	ST 172Y	R P 364
67	土師器	平	(139)	56	49	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 94Y	R P 43
68	土師器	平	130	57	45	織物模	良	浅黄色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 94Y	R P 36
72	須恵器	平	(144)	70	38	織物模	不良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 186 E K35F	R P 127
74	須恵器	高台付平	151	81	66	織物模	不良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 156Y	墨食「十」 沖がみ R P 169
76	須恵器	平	—	—	60	織物模	良	灰色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	ST 3F	郵用机 朱墨食 R P 59
68	土師器	壺	(242)	—	—	織物模	良	绿色	ロクロ	ロクロ	外面部化物付	ST 94Y	—
70	土師器	壺	(134)	75	140	織物模	良	浅黄色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 94Y	肖夏目化物付 削代裏 R P 46
71	土師器	壺	—	227	—	織物模	良	绿色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 94Y	外面部化物付 削代裏 R P 46
72	土師器	平	139	68	58	織物	良	绿色	ケズリ	ケズリ	—	ST 5F	内面無色光澤 削代裏 R P 52
75	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	淡褐色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 156Y	内面無色光澤付 削代裏 R P 117
77	土師器	壺	—	75	—	織物模	良	绿色	ナダ	ハケヌ	—	ST 3Y	削代裏 R P 60
76	土師器	壺	—	82	—	織物模	良	浅黄色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 5 E L144	削代裏 R P 61
79	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	黑色	アラシ	タタキ	—	ST 161Y	R P 58
80	土師器	壺	(83)	—	—	織物模	良	灰褐色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 161Y	削代裏 R P 57
81	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	灰褐色	ハケヌ	ハケヌ	—	ST 161Y	外面部化物付 削代裏 R P 177
82	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	ナダ	ST 179Y	R P 91
88	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	灰色	アラシ	タタキ	—	SD 18Y	R P 3
93	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	灰色	アラシ	タタキ	—	SD 163Y	R P 81
100	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	绿色	ロクロ	ロクロ	—	SD 171F	R P 176
83	須恵器	平	(120)	(54)	27	織物	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 18Y	R P 2
84	須恵器	平	(148)	50	42	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 16Y	R P 11
85	須恵器	高台付平	—	63	—	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 18Y	R P 21
86	須恵器	高台付平	—	58	65	織物模	良	オリーブ褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 18Y	墨食「十一？」 R P 6
87	須恵器	壺	—	15	—	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	—	SD 18Y	—
88	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	灰褐色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 18Y	R P 7
90	土師器	平	—	(62)	—	織物模	良	绿色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 18Y	墨食「十」 R P 14
91	土師器	高台付平	(132)	(50)	42	織物模	良	灰白色	ミガキ	ロクロ	圓軸系物	SD 18Y	内面無色光澤 R P 23
92	須恵器	平	—	—	—	織物模	良	黄褐色	ロクロ	ロクロ	—	SD 28Y	—
94	須恵器	壺	(114)	—	—	織物模	良	灰褐色	ハケヌ	ハケヌ	—	SD 163Y	R P 26
97	須恵器	平	—	39	—	織物模	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 171F	R P 25
98	須恵器	高台付平	119	77	42	織物模	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	圓軸系物	SD 171F	R P 24
99	須恵器	壺	—	148	—	織物模	良	灰白色	ロクロ	ロクロ	—	SD 171F	R P 25
95	土師器	平	(160)	(10)	73	織物	良	绿色	ハケヌ	ハケヌ	—	SD 40Y	丸底 R P 87
96	土師器	壺	—	—	—	織物模	良	绿色	ハケヌ	ハケヌ	—	SD 40Y	口跡無地 R P 86
101	土師器	高台	(230)	—	121	織物	良	绿色	ナダ	ナダ	—	SD 16Y	R P 31
103	須恵器	壺	—	—	—	織物模	良	灰色	ロクロ	ロクロ	ナダ	ST 188F	外面部化物付、糊み目、沈縫

出土した遺物

表4 弥生土器観察表

番号	器種	胎土	文様	焼成	型式	出土地点	備考
103 鋸	金縫合 石英 砂混	波状文	ハケ目	板井式	B区Ⅱ	内面ナメ 平筋竹管	
104 鋸	石英 砂混	波状文		板井式	ST161F	平筋竹管	
105 鋸	金縫合 石英 砂混	波状文		板井式	B区Ⅱ	平筋竹管	
106 鋸	石英 砂混	竹管割れ	R.L斜	天王山式	B区Ⅱ		
107 鋸	石英	鋸目 沈縫 刃尖	L.R	天王山式	ST166F		
108 鋸?	金縫合 石英			砂条L	天王山式?	ST164F	

表5 石製品観察表

番号	器種	計測値			破損の有無	調査その他の	素材	出土地点	備考
		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)					
109 砥石		27	27	46.6	有	砥面4面	滑灰岩?	ST162F	
110 砥石		60	36	164.0	有	砥面3面、他面打欠き	滑灰岩?	26-19Ⅲ	
111 砥石?		17	8	2.6	有	6面削取り直	滑灰岩?	ST147Y	2分削取れ、機器用砥石? E-Q4

表6 金属製品観察表

番号	品別	材質	計測値				破損有無	出土地点	備考
			長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重量 (g)			
112 矛頭車	鉄	円錐形	47	6	136	30	57.54	有	ST147F
113 矛頭車	鉄	円錐形	50	13	11.8	30	61.03	有	ST4Y
114 矛頭車	鉄	円錐形	51	15	10.1	9	44.02	有	ST1-EK379
115 刀子	鉄		367	34	4	48.17	有	ST161Y	本柄残存 RM68
116 刀子	鉄		385	38	14	57.21	有	ST157F	RM69
117 刀子	鉄		120	17	7	35.90	有	ST146Y	RM167
121 刀子	鉄		52	21	16	17.74	有	ST3Y	
120 刀子	鉄		120	30	9	28.13	有	ST186F	RM92
118 刀子	鉄		96	13	4	26.78	有	ST4F	
119 刀子	鉄		12.5	12	11	21.36	有	ST182F	
122 線	鉄		365	34	11	106.15	有	ST147Y	RM47
123 不定	鉄		45	6	8	6.45	有	ST1Y	
124 不定	鉄		137	11	11	11.70	有	ST225F	
125 不定	鉄		84	30	20	46.09	有	ST186Y	RM66
126 不定	鉄		49	8	11	9.40	有	ST186-BP307	
127 不定	鉄		111	12	9	20.94	有	ST2F	RM98

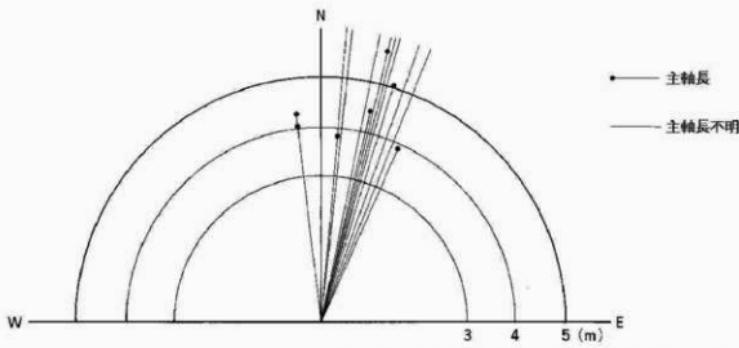
VI まとめと考察

遺構

今年度の調査では、17棟に及ぶ竪穴住居跡をはじめとして、井戸跡、溝跡等総数430基に及ぶ遺構が検出された。

竪穴住居は全て、9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。SG171河川跡に切られるもの、SG171を切るものが存在することから、河川埋没前から埋没後にかけて営まれた集落といえる。カマドを持つものと、カマドを持たないものがあり、カマドを有する場合は、礫を袖の芯材としている。部分的な検出にとどまった例が多いことから、北辺に垂直な軸を主軸とし、住居が示す主軸方位について考察した。なお、プランが不明であるST156・200は除いた。この結果、主軸方位は3群に大別される。第1群は、磁北から西に振れるもの、第2群は、磁北から東に振れる角度が12°未満のもの、第3群は、磁北から東に振れる角度が12°以上のものである。第1群にはST4・5が含まれ、共にSG171を切る。SG171を切るSD18・40と同時期の遺構と考えられ、最も新しい竪穴住居群である。1辺が4m前後であり、床面積は17m²程度である。カマドを持たない点で共通しているが、周溝の有無や柱穴など、構造的には違いが見られる。第2・3群には、新旧の竪穴住居が混在する。主軸方向にやや幅があり、規模や構造にも差があるが、時系列的な違いは認められない。切り合い関係から考察すると、一時期に存在した竪穴住居の数は、2~3軒である。

溝跡が7条検出されている。古墳時代の溝跡が1条、平安時代の溝跡が6条である。古墳時代の溝跡がやや湾曲しながら南北方向に走るのに対して、平安時代の溝跡はいずれも東西方向に走る。平安時代のSD235・163・18溝跡は、3次調査で検出された溝跡に連続することが確認でき、これらの溝跡が更に東方まで伸びることから、遺跡範囲が東方に広がっていることがうかがえる。また、検出された14基の井戸跡がSD235溝跡の周囲に集中して分布しており、3次調査と同じ傾向を示している。



第38図 竪穴住居跡主軸方位及び主軸長一覧

B区で河川跡と推測できる砂の堆積が2カ所確認できる。一部分だけの検出であり、これらの河川跡が連続するか否かは断定できない。しかし、立地と環境でも述べたとおり、本遺跡の北方100mを白川が西流しており、白川との何らかの関係が考えられる。

遺物

出土遺物の中で特筆されるのは、S T147堅穴住居跡床面から出土した須恵器皿(51)とS T3堅穴住居跡覆土から出土した須恵器壺(76)である。51は内面見込みに墨を擦ったことでできた滑らかな面が認められることから、転用硯と考えている。口縁部の9割ほどが破損している。破断面には、意図的に打ち欠かされたと考えられる痕跡が10数カ所確認でき、転用するために意図的に成形したことがうかがえる。76も転用硯である。見込み内面に墨痕が認めら、朱墨と思われる痕跡も明確に認められる。体部中央から口縁部までが破損し、底部から体部中央までが残存している。51ほど明確に打ち欠かれた痕跡は認められないが、転用するために意図的に打ち欠いたと考えることも可能であろう。土師器壺の中には、灯明皿として転用されたもの(55)が出土している。口縁内部にすすと思われるものが帯状に付着し、芯があった痕跡が明確に認められる。出土遺物でも述べたとおり、体部下端に凹線を施し、体部と底部の境を明瞭にする意図がうかがえ、須恵器高台付壺を模して制作されたと考えられる。このタイプの土師器壺は2点出土しており、91は内面にミガキ調整が施され、黒色処理されている。

文字資料としては、出土遺物でも記述した墨書き器があげられる。墨書きされた字種が、「十」や「十一？」等の数に関係するものが多いのが特徴と言えよう。解読不能の文字の中には、何らかの絵のように見えるもの(53)もあり、異質な感じを受ける。

本遺跡の南方2.5kmに、役所的な機能を備えた集落、あるいは祭祀関連の集落と想定される今塚遺跡がある。今回の調査では、祭祀に関連する遺構や遺物は確認されていないため断定はできないが、距離的に近いこと、9世紀という時代観が一致すること、朱墨痕のある転用硯や絵のように見える文字資料が出土していることなどから、今塚遺跡との間に何らかの関連があるのだろうか、今後の資料の増加を待ちたい。

出土文字資料の解読にあたっては、米沢女子短期大学の三上喜孝氏に指導・助言を賜った。

〈参考文献〉

- 須賀井新人他「今塚遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第7集:1994
佐藤庄一他「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第17集:1979

報告書抄録

ふりがな	むかいかわらいせきだい4じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	向河原遺跡第4次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第107集							
編著者名	黒沼昭夫・竹田純子							
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	2002年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかいかわらいせき 向河原遺跡	やまがたけんやまとがた 山形県山形 し わかあらじよしだ 市大字淡江 むかいかわら 字向河原	6201	平成2年 度登録	38度 18分 40秒	140度 19分 27秒	20010710 ～ 20011012	1,000	特定道路 山形羽入 線道路改 築工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
集落跡	奈良・平安	竪穴住居	17	須恵器・土師器 鉄製品・石製品	平安時代の竪穴住居跡が重複して17棟検出された。また、井戸跡が14基、3次調査で確認された溝跡が更に東側に連続することが確認された (総出土箱数: 30)			
		川	1					
		土坑	10					
		柱穴	320					
		溝	7					
		井戸	14					

図 版



重機粗掘状況（北より）



遺構精査状況（北より）



平面図作成状況（南より）



調査説明会状況



S D 18溝跡・S K 19土坑精査状況（東より）

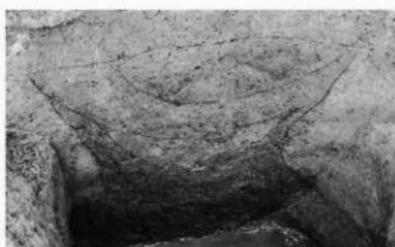
図版2



S K 23土坑土層断面（南西より）



S K 23土坑完掘状況（南西より）



S E 280井戸跡土層断面（東より）



S E 273井戸跡土層断面（西より）



S E 247井戸跡完掘状況（東より）



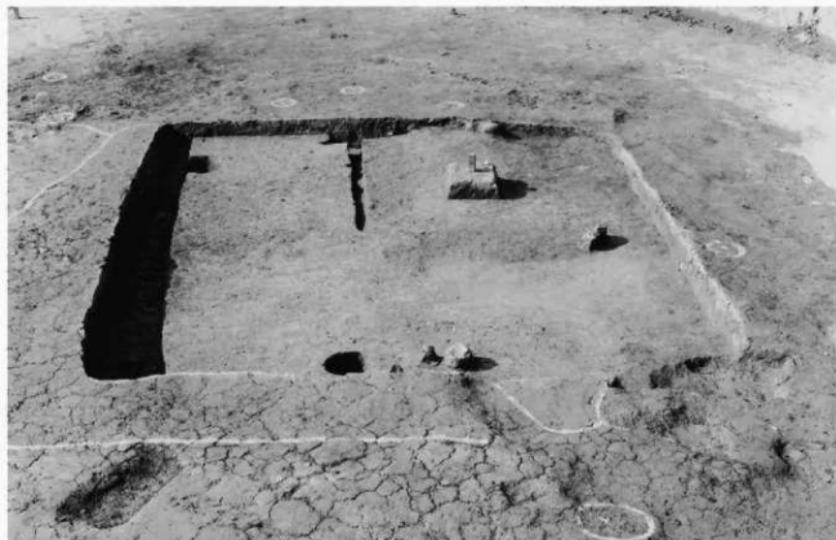
S E 268井戸跡完掘状況（南より）



S T 172堅穴住居跡完掘状況（東より）



ST157・179堅穴住居跡床面検出状況(東より)



S T 5 堅穴住居跡床面検出状況（南より）



S T 5 堅穴住居跡完掘状況（南より）

図版4



S T 3 堅穴住居跡床面炭化物検出状況（南より）



S T 3 堅穴住居跡完掘状況（南より）



S T 147堅穴住居跡床面検出状況（北東より）



S T 147堅穴住居跡完掘状況（北東より）

図版 6



S T 4 堅穴住居跡床面炭化物検出状況（東より）



S T 190堅穴住居跡完掘状況（北より）

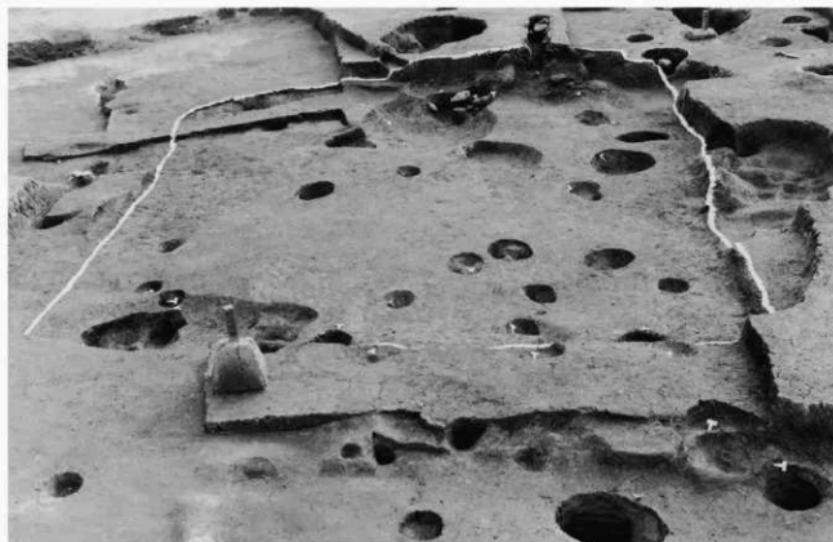


S T 186堅穴住居跡完掘状況（北より）



S T 186 - E L 180完掘状況（北より）

図版8



S T 1 堅穴住居跡完掘状況（北より）



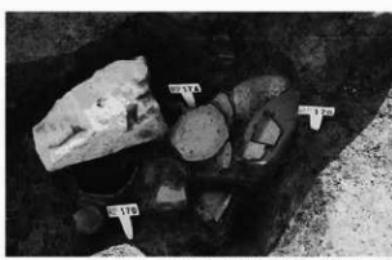
S T 1 - E L 149完掘状況（北より）



S T 1 - E K 379出土状況（北より）



S T 1 - E L 149出土状況（北東より）



S T 1 - E K 379出土状況（北より）



土器捨て場遺物出土状況（北より）



R P 145出土状況



遺物出土状況



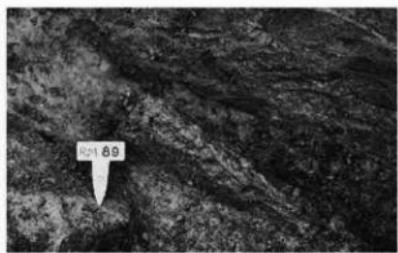
R P 147出土状況



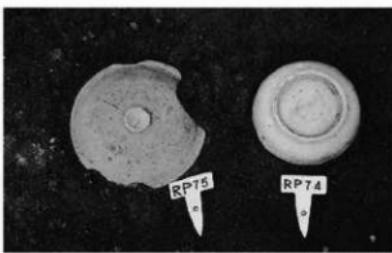
R M46出土状況



R M47出土状況

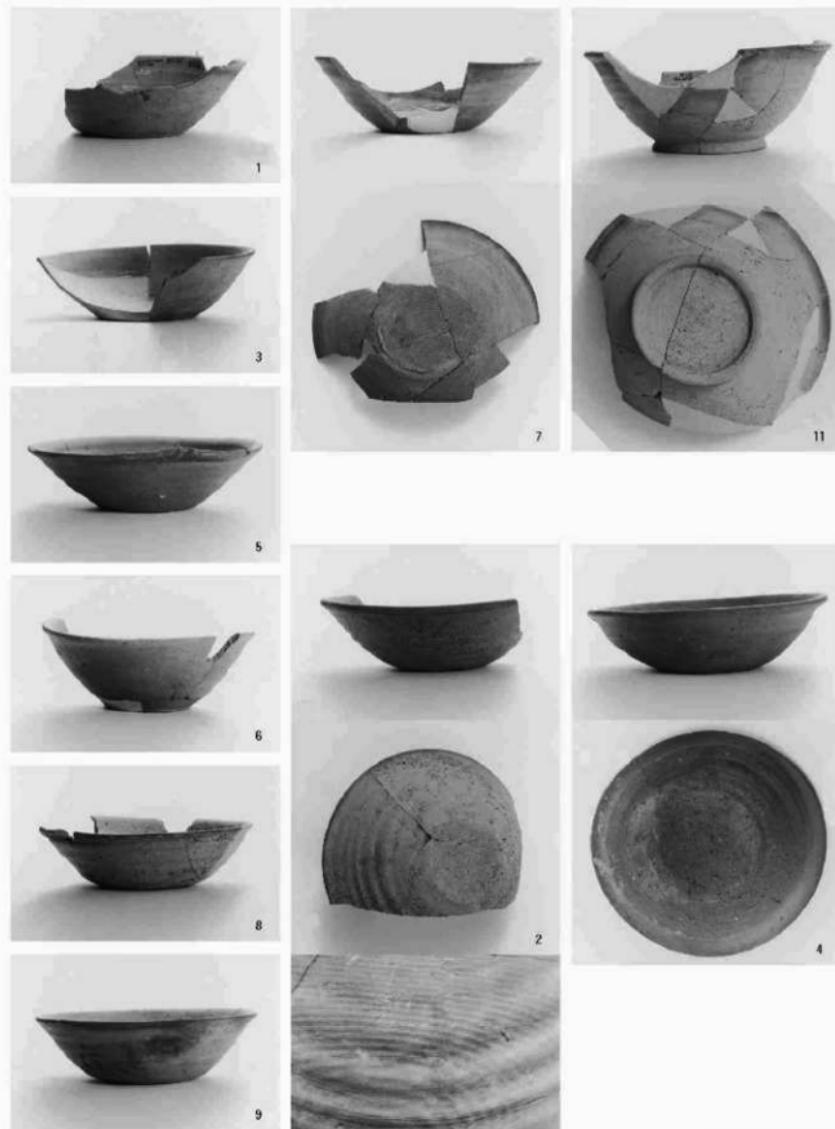


R M89出土状況



R P 74・75出土状況

圖版10



出土遺物（1）



10



11



12



13



14



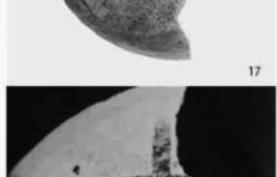
15



16



17



18



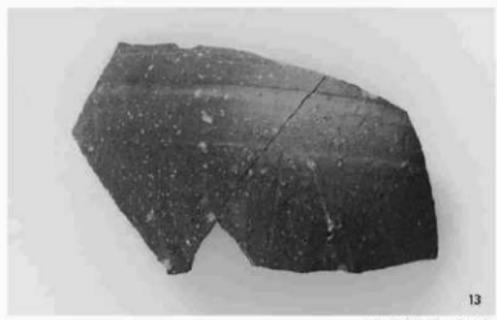
19



20



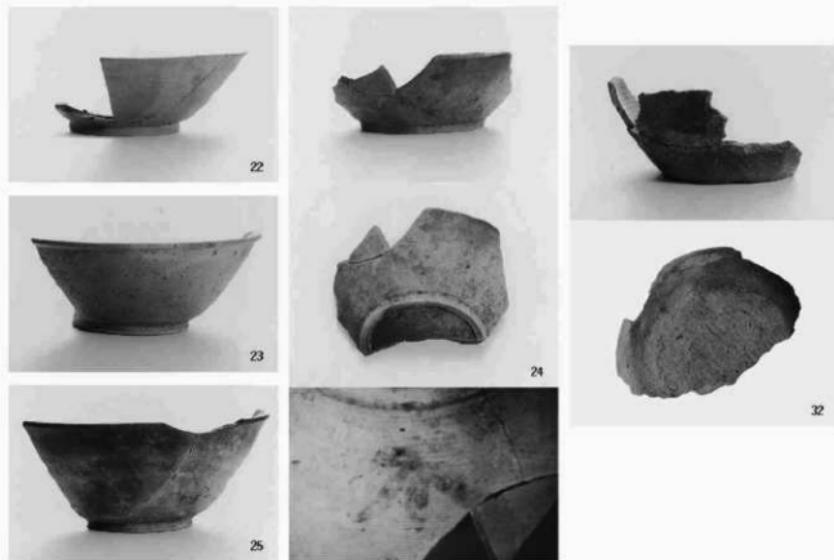
21



13

出土遺物（2）

圖版12



出土遺物（3）



33



34



35



36



37



38



39

出土遺物 (4)



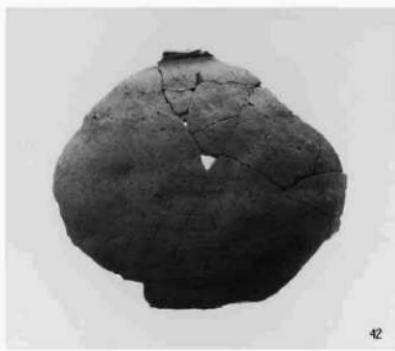
41



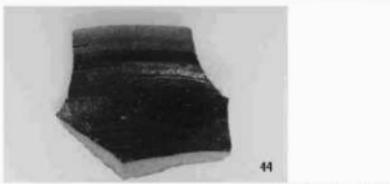
40—a



40—b

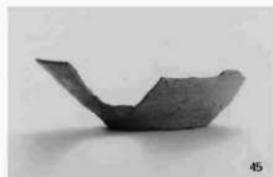


42



44

出土遺物（5）



45



47



46



49



50



51



52



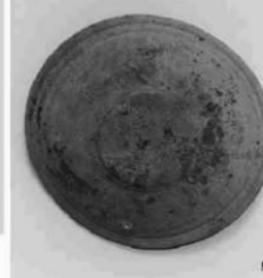
53



55



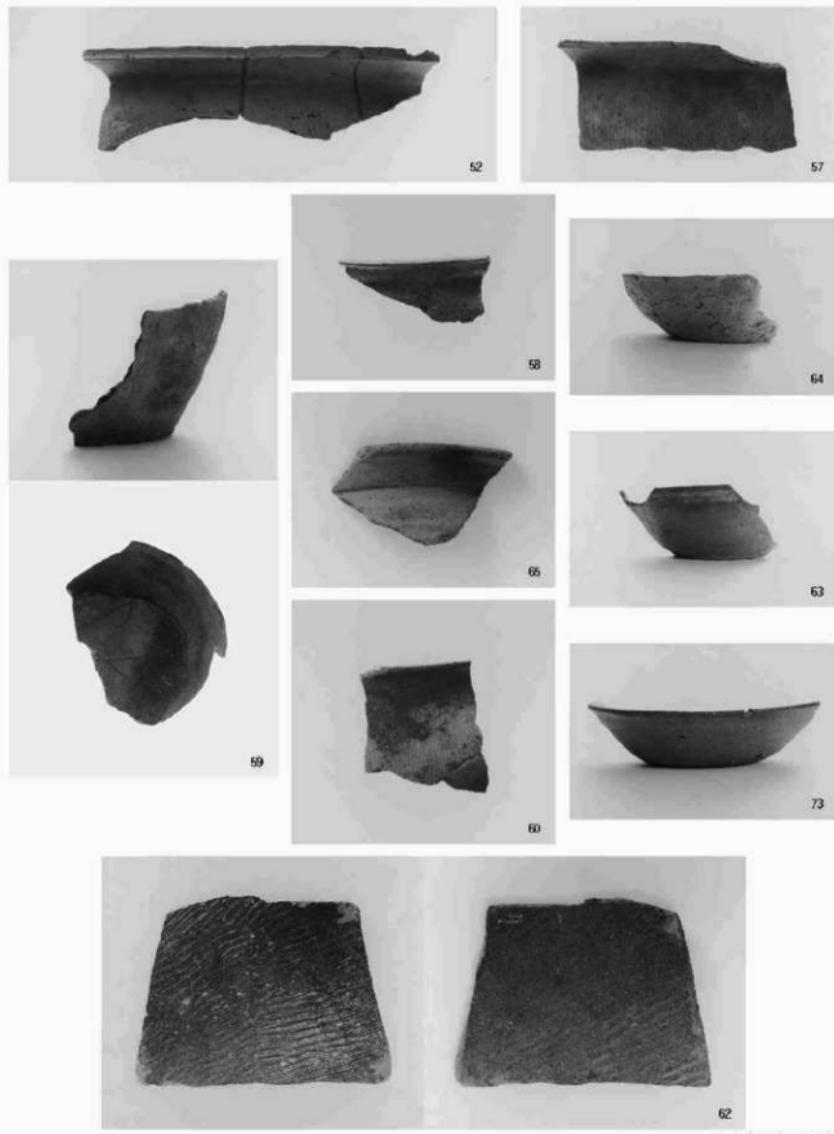
56



58

出土遺物（6）

圖版16



出土遺物（7）



60



66



67



68



76

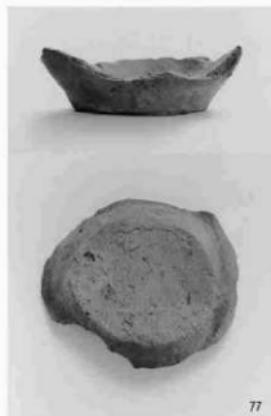
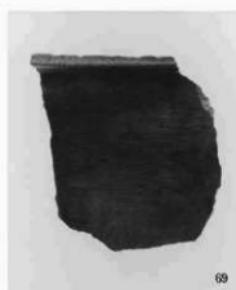


70

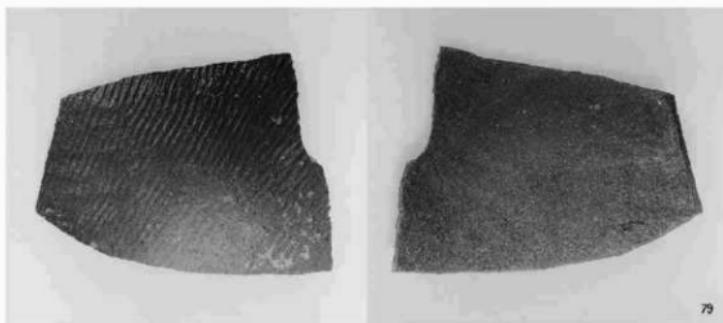
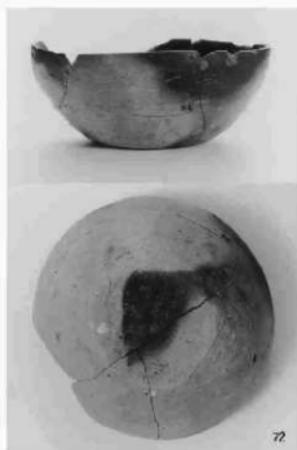


出土遺物 (8)

圖版18

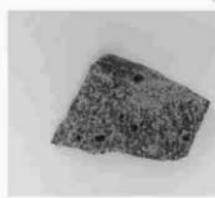
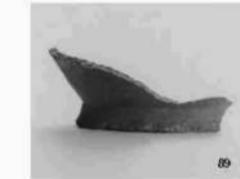
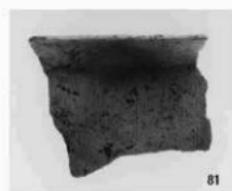


出土遺物（9）

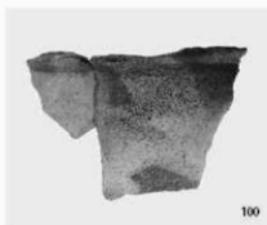


出土遺物 (10)

圖版20



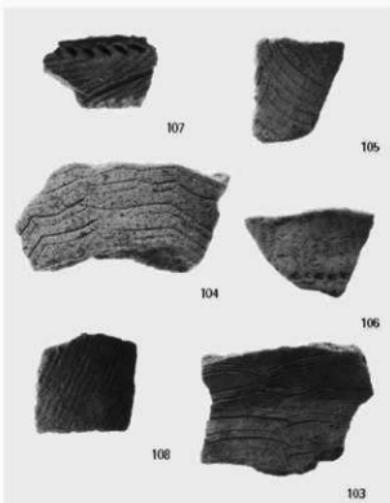
出土遺物 (11)



出土遺物 (12)



102

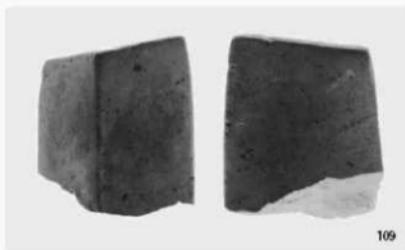


96

出土遺物 (13)



110

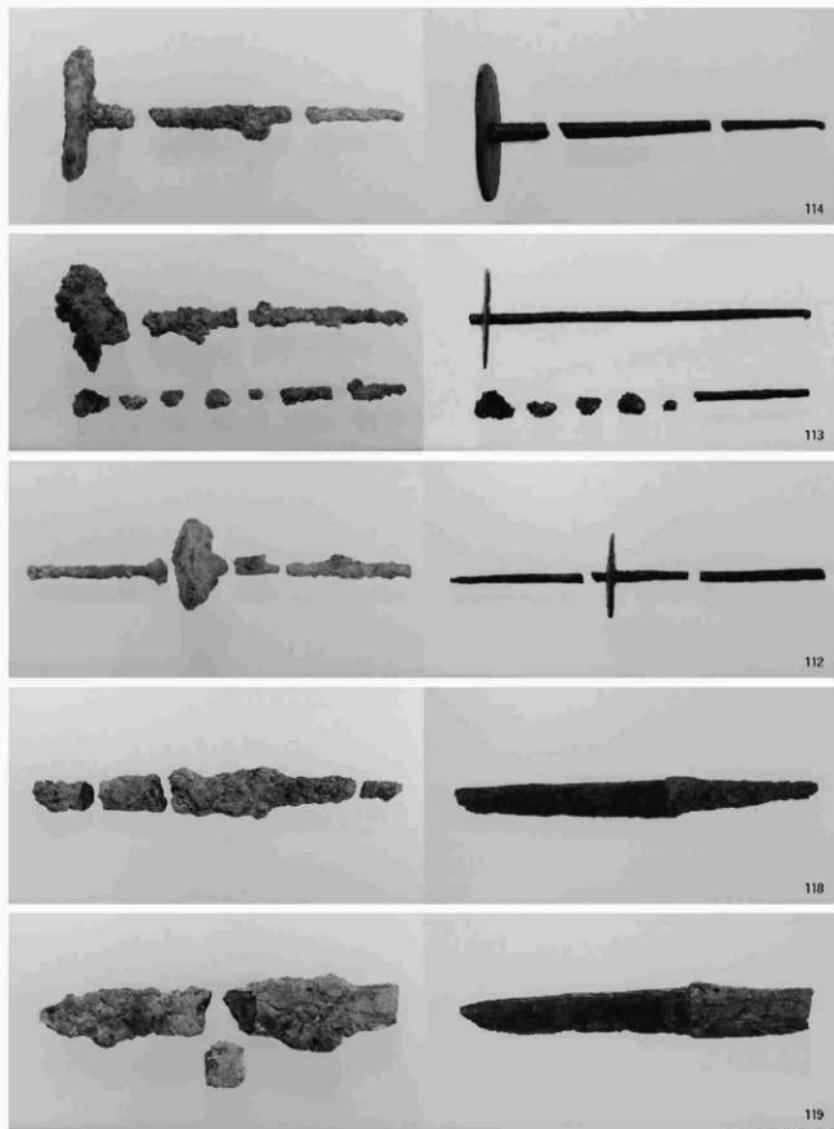


109

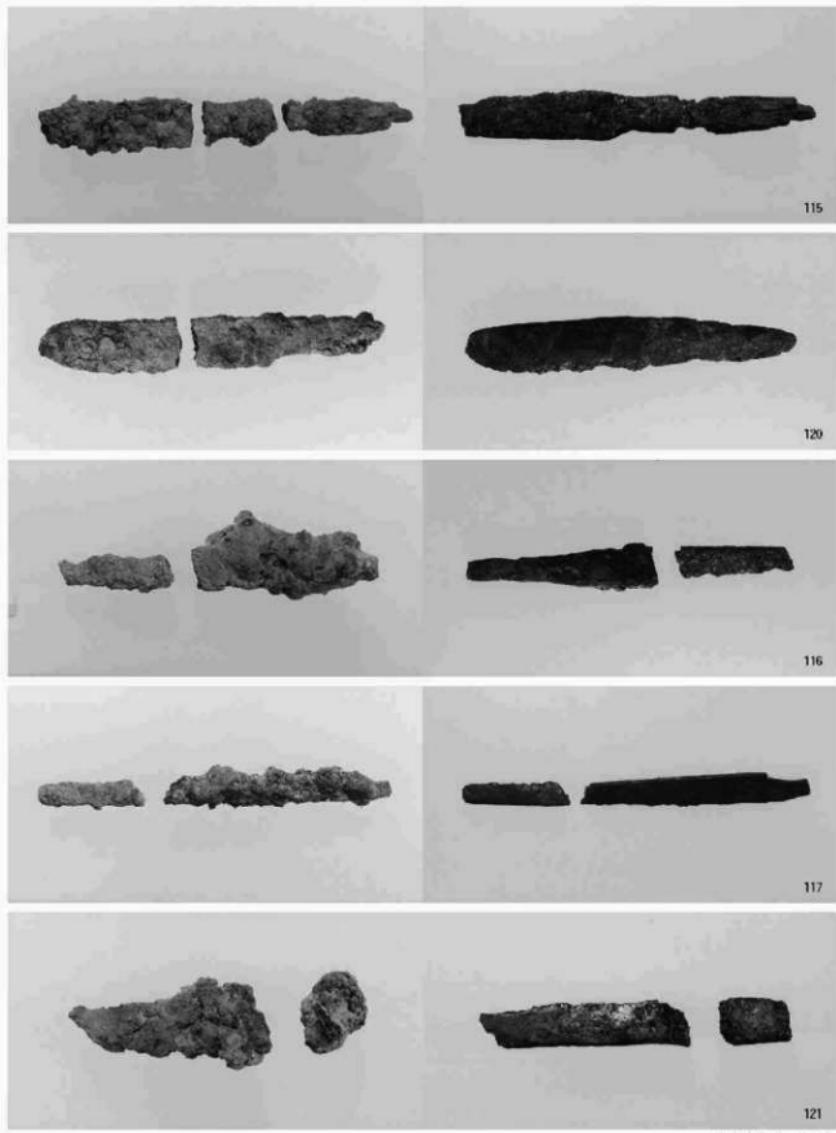


111

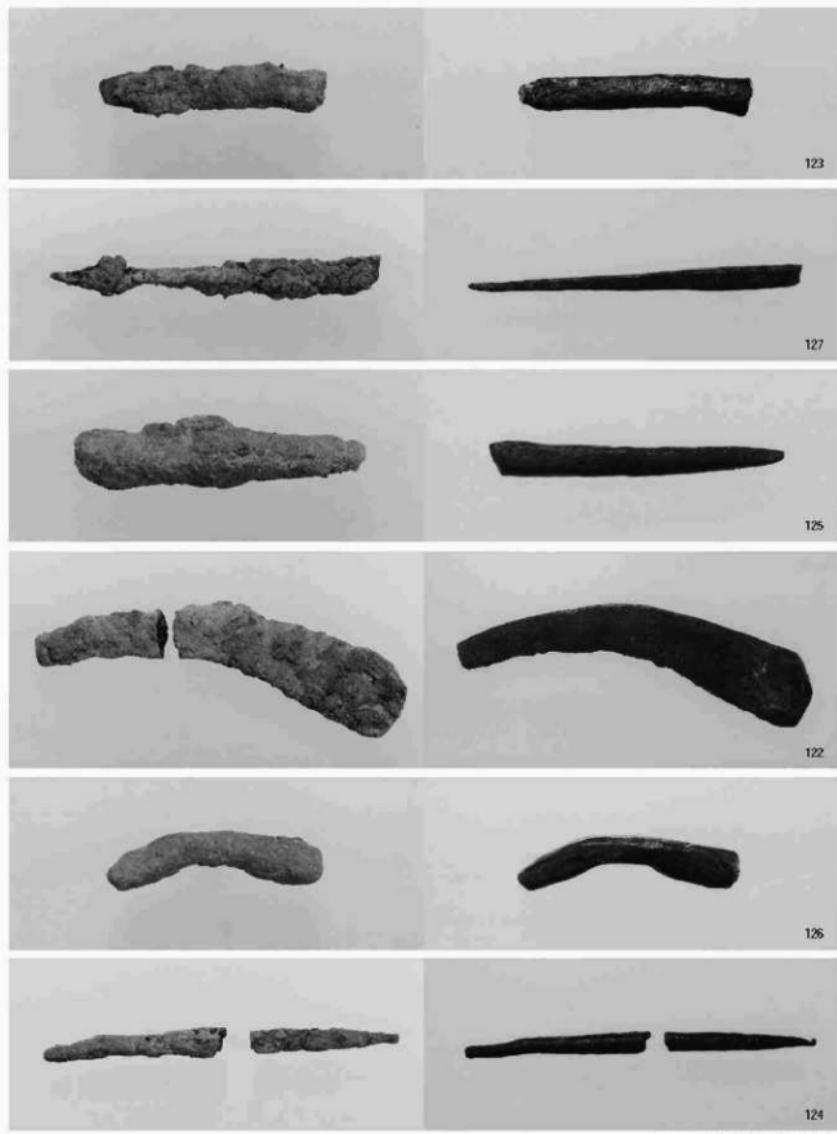
出土遺物 (14)



出土遺物 (15)



出土遺物 (16)



出土遺物 (17)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第107集

向河原遺跡第4次発掘調査報告書

2002年3月25日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 山形印刷株式会社
